
クリスマスプレゼント

スラ ラノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマスプレゼント

【Nコード】

N6564P

【作者名】

スラ ラノ

【あらすじ】

クリスマススイブ。

この日は、子供達にプレゼントを配るため、サンタクロース達にとって最も忙しい日となる。

そんな中、1人の新米サンタクロースがトラブルを起こしてしまい……。

父を亡くした兄妹と、新米サンタクロースのお話です。

2011/12/24

2nd Season 公開

同様のテーマから作った自作曲『サンタはいないと・・・』を歌
ってみました。

<http://www.youtube.com/watch?v>

FBNAOE2P090

「奈々^{ナナ}、今年はサンタさんに何をお願いするんだい？」

毎年恒例の父の質問を圭介^{ケイスケ}は黙って聞いていた。

「うーん、何にしようかなー」

「圭介は何か欲しい物ないのか？」

奈々がなかなか答えられそうになかったためか、父は圭介にも同じ質問をした。

「いや、もう中学生だし、欲しい物は自分で買うから良いよ」

「何言ってるんだ？ サンタさんをお願いすれば聞いてくれるかもしれないだろ」

「そっだよ、お兄ちゃん！」

「いや……」

圭介がプレゼントを断った理由は中学生になったからという事だけではない。

それよりも大きな理由が圭介にはあった。

それは、親に無理をさせたくないという理由だ。

この時、圭介は父がこの後取る行動を予想していた。

今、圭介と奈々の欲しい物を聞き、その後週末の休日を利用してプレゼントを買う。

そのプレゼントを3週間ほど秘密の隠し場所に保管して、クリスマススイブの深夜、圭介達の枕元に置く。

それが毎年父の行っている事だ。

圭介は数年前、父がそんな事をしてしていると知った。

いや、知ってしまったといった方が正しいかもしれない。

圭介はある日、ほとんど開ける事のない物置の中でプレゼントを見つけてしまった。

それから、クリスマスというものは、サンタクロースからではなく、父からプレゼントをもらえる日だと思うようになった。

それでも、去年までは気付いていない振りをしてプレゼントをもらっていた。

しかし、今年は去年までと状況が違っている。

父がリストラにあったのだ。

その後、新しい職に就いたが、前に比べれば収入は少なく、いつも忙しそうにしている。

そんな父の事情を知っているため、圭介は素直にプレゼントを頼む気になれないでいる。

しかし、6歳も年下の妹の前でそんな事を言う訳にもいかず、圭介は言葉を詰まらせるだけだ。

「私、今年は熊のぬいぐるみをお願いする!」

「そうか。サンタさん、きつと聞いてくれるよ」

「私、今年はサンタさんに会うためにずっと起きてる!」

「起きてたらサンタさんは来ないよ」

そんな父と妹の会話を聞きながら、圭介は逃げるように自分の部屋へ戻る。

圭介は一通り学校に行く準備を終えると、最後にボロボロになったグローブをカバンの中に入れようとした。

「圭介」

その時、ドアをノックする音と共に父の声が聞こえた。

「ちよつと良いか?」

父は圭介の返事を待つ事なく、ドアを開けて部屋に入ってきた。

「何?」

「いや……グローブ、もうボロボロだな」

父は圭介が持っているグローブを見てそう言った。

野球部に入っている圭介にとって、グローブは当然大切なものだが、しかし、圭介の持っているグローブはとても使い古されたもので、思い通りに活躍してくれそうにない。

「ずっと使ってるからね」

「買い換えないのか?」

「そのうち買うよ」

圭介は素っ気ない返事を繰り返す。

「サンタさんをお願いしたらどうだ？」

「無理しなくて良いよ」

圭介は冷めた声だった。

「金貯めたらグローブは自分で買うから、奈々にだけプレゼント買ってあげてよ」

父は圭介の考えを理解したのか、何も返さなかった。

「……それじゃあ、朝連あるから行ってくるね」

圭介は父を避けて部屋を出て行く。

「行ってきます」

部屋の前に残した父を気にしつつも、圭介は家を出た。

「圭介！」

「母さん、そんなに騒いで、どうしたの？」

「父さんが……」

「父さんがどうしたの？」

「交通事故に遭って……」

特に見たい番組はなかったが、圭介はテレビをつけていた。

「今日はクリスマススイブ。例年よりも気温が低いとの事ですが……」

そんな言葉がテレビから聞こえてきたが、圭介はテレビに目をやる事もなかった。

そして、時計を確認すると、圭介は簡単にまとめた荷物を持ち、玄関に向かう。

「お兄ちゃん？」

奈々に声をかけられ、圭介はすぐに振り返る。

「何？」

「どこか行くの？」

「うん、友達の家に行ってくる。帰りにクリスマスケーキ買ってくるよ。ケーキ、奈々はどんなのが良い？」

圭介の質問に奈々は答えようとしなない。

「奈々？」

「今からお願ひ変えたら、サンタさん、聞いてくれるかな？」

「え？」

「プレゼント、変えてくれるかな？」

奈々は下を向いている。

「他に欲しい物あるの？」

「…………お父さんに会いたい」

「え？」

奈々の言葉に圭介は言葉を失ってしまった。

「お父さんに会いたいつて頼んだら、サンタさん…………」

「奈々、サンタさんにだつて出来ない事はあるんだよ」

「サンタさんはどんな願ひでも叶えてくれるもん！」

「奈々、父さんは遠くに行っちゃったの。だから、すぐには帰って

これないんだよ」

「じゃあ、いつ帰ってくるの？」

「それは…………」

奈々の質問に圭介は答えられなかった。

それは、突然の事だった。

父が交通事故に遭った。

大きな事故ではなかったが、父は倒れた時に勢いよく頭をぶつけてしまい…………。

打ち所が悪かったらしい。

最後に見た父はまるでただ眠っているかのようだった。

特に怪我をしているようにも見えず、すぐに目を覚ましてもおおかしくない様子だった。

しかし、父はもう目を覚まさない。

「サンタさんをお願いすれば、お父さんに会えるよね？ お兄ちゃんもお願いしようよ！」

「そんなの無理だよ！」

圭介が突然叫んだ事に驚いたのか、奈々は話を止めた。

「どうしたの？ ケンカ？」

圭介の声を聞いた母がやってくると、奈々は母に抱きつく。

「奈々、どうしたの？」

「サンタさんをお願いしたら、お父さん帰ってくるよね？」

「そうね……」

母は優しく奈々を抱きしめる。

「うんとお願ひしたら、お父さん帰ってくるかもね」

「帰ってこないのに、そんな事言っただけを期待させるなよ！」

「圭介！」

母は圭介に近づくと、頬を叩く。

「……サンタなんていないんだよ。だから父さんは帰ってこないんだよ」

「サンタさんはいるもん！ お父さんだって帰ってくるもん！」

「帰ってこないよ！ だって父さんは……」

「圭介、いい加減にしなさい！」

母が怒鳴り、圭介は話を止めた。

母は少しの間、考えた様子を見せた後、口を開く。

「奈々、よく聞いて。サンタさんは色んな子にプレゼントを配らないといけないでしょ？」

「……うん」

「だから、奈々のためにお父さんを連れてくる事は出来ないの」

「何で？」

「だって、あんなに大きなお父さんを袋に入れてくるのよ？ そんな事したら他の子のプレゼントが入らなくなってしまうわ」

それが、母に出来る精一杯の言い訳だったようだ。

「だったら、熊のぬいぐるみなんていらんもん！」

「奈々……」

「お父さんが帰ってきてくれないなら何もいらん！ サンタさんも来ないで良い！」

そのまま、奈々は家を出て行ってしまった。

「奈々！」

「大丈夫、すぐに帰ってくるよ」

「圭介、何であんな事言ったのよ？」

「……俺、友達の家に行くってくるね」

圭介は母の質問に答える事なく、家を出て行った。

圭介はポケットに手を入れながら歩いていた。

時折、北風が吹く度に圭介は体を震わせる。

元々寒がりで、圭介は冬によく風邪を引いてしまっている。

その事から、圭介は冬が嫌いになっていた。

出来る事なら暖房の効いた家の中にずっといたいと思っていたが、

親友の明達^{アキラ}と約束があるため、そもいかない。

そんな事を考えながら、明の家に着すると、圭介はすぐにチャイムを押す。

「はい？」

「あ、圭介。寒いから早く入れてくれー」

「ああ、わかったわかった」

それから数秒後、ドアが開く。

「圭介、メリークリスマス！ 由香里^{ユカリ}も来てるぞ」

「とりあえず中に入れてくれよ」

「ああ、悪い悪い。ホント寒がりだな」

明はそう言いながら圭介を家の中に入れる。

「暖房で部屋の温度、40度ぐらいにしようぜ」

「勝手に人の家をサウナにすんなよ。やるなら自分の部屋でやれ」

「冗談だよ。でも、なるべく上げて」
「はいはい」

圭介と明はバカな話をしながら部屋に着くと、すぐにドアを開ける。
「圭介、メリークリスマスー!!」

ドアを開けると、幼なじみである由香里の元気な声が聞こえた。

「はいはい、ありがと」

「もう、冷め過ぎだよ」

「寒いんだからしょうがないじゃん」

「ホント、寒がりなんだから」

「はいはい、夫婦ゲンカは後にしろって」

明がそう言っていると、由香里は顔を赤らめる。

「ちよっ、何言ってるのよ!?!」

「あ、顔赤くなってやんのー」

「なつてないよ!」

明と由香里がふざけあつてる間に圭介は暖房のリモコンを手に取る。

「おい、勝手に設定変えんなよ! しかも設定温度、限界まで上げんなよ!」

「寒いんだからしょうがないじゃん」

「だからって上げ過ぎだろ」

明が暖房の設定を直している間に、圭介は鼻をすすりながら適当な場所に座る。

「圭介、今日は何時ぐらいまで遊べるんだ?」

「ああ、奈々にケーキ買ってくから、4時から5時ぐらいかな」

「妹想いだねー」

「ああ、まあ……」

由香里の言葉を聞き、圭介は少しだけ考え込んでしまった。

「さつき、奈々とケンカしたけどね」

「え?」

「完全に俺が悪いし」

「どうしたの?」

圭介は少しだけ話すべきか考えたが、結局話す事にした。

「父さんに会いたいってサンタさんをお願いしたら、聞いてくれるかなんて言われてさ……」

「奈々ちゃんは、お父さんに会えないって事、まだ理解出来ないよね」

「俺、何か頭にきちゃって、サンタさんなんていないんだって言うっちゃった」

圭介の言葉に明と由香里は何も返さなかった。

「俺、奈々に変な期待をさせたくないって言うより、何か……」

「今日はクリスマススイブなんだし、楽しもうよ！」

由香里の言葉に、明は慌てた様子で反応する。

「あ、そうそう。何かゲームでもやるうぜ。何が良い？ 対戦出来るやつは……」

明はそう言いながら色んなゲームソフトを引っ張り出す。

圭介は気を使ってくれている2人に心の中で感謝した。

「そんなに出されても全部出来ないだろ。それにこれRPGだから対戦出来ないよ」

「うっさいな」

「逆切れかよ？」

「いや、逆じゃねえだろ」

「いや、逆だろ」

明とくだらないやり取りをしている圭介を見て、由香里は声を上げて笑った。

リナはおぼつかない手付きでプレゼントを包んでいた。

「頑張ってるね」

「あ、先輩！」

その時、リナは師匠のような存在でもある先輩のレイアに声をかけられ、すぐに返事をした。

「もう慣れた？」

「いえ、まだまだですよ」

「2年目でそれだけ出来れば十分だよ」

「そんな事ないですよ」

リナはレイアに褒められ、照れくさそうに笑う。

「ところで、カイトはどこに行ったか知らない？」

「え、いないんですか？」

「全く、今日が初仕事だっていうのに何やってんだか……」

「私、捜してきますね」

リナは今していた仕事を中断させると、すぐにカイトを捜し始める。

リナはカイトがどこにいるか、大体の見当を付けていたため、すぐに見つかると思っていた。

しかし、いくら捜してもカイトは見つからない。

「もう、どこに行っちゃったのよ？」

「リナ！」

その時、レイアから呼ばれ、リナは足を止める。

「いましたか？」

「いや、いないよ。しょうがないから、長に捜してもらってる。多分、すぐに見つかるよ」

「ごめんなさい。カイトが迷惑かけて……」

「いや、リナは悪くないよ」

そんな話をしながら、2人は長のもとに向かう。

長は水晶を使ってカイトを捜していた。

「見つかりましたか？」

「ちよつと待つとくれ」

その時、長は驚いたような反応を見せる。

「いましたか？」

「いた事はいたんじゃないが……」

長はカイトを見つけたにも関わらず、嬉しそうな様子ではない。

「どこにいたんですか？」

「それが……人間界にいるようなんじゃない」

長の言葉に、周りにいた者は言葉を失う。

「あいつー！」

レイアの反応を見て、リナは慌てて支度を始める。

「私、すぐに連れてきますから！」

リナは走ってその場を後にした。

「もう、カイトのバカ！」

リナの言葉がカイトに届く事はないが、リナは何度もそう言った。

「それじゃあ、またな」

午後の4時を過ぎ、圭介と由香里は家に帰る事にした。

「あ、もう少しだけ帰るのやめようかな」

外に出た途端、圭介は急に弱気な発言をした。

「もう、奈々ちゃんにケーキ買ってあげるんでしょ？」

「わかったよ。それじゃあ、俺はこっちから帰るから」

「うん、じゃあ先に帰ってるね」

「圭介、呼び止めなくて良いのか？ 由香里、本当は圭介のそばにいたいって思ってたんだから誘ってやれよ」

由香里が振り向いた瞬間、明は隠れるように家のドアを閉める。

「もう……圭介、私はそんな事全然思ってたないからね」

「わかってるよ。とにかく、俺は早く帰りたいからもう行くね」

すぐにも家に帰りたい圭介にとって、由香里の事はどうでも良い事になっている。

「うん、早く帰らないと奈々ちゃんも待ちくたびれちゃうしね。あ、後で遊びに行つて良いかな？」

「良いよ。奈々も喜ぶだろうし」

「それじゃあ、後でね」

圭介と由香里はお互いに手を振った後、別々の方向に歩き出した。

圭介と別れた後、由香里は何度も通っている道を歩いていた。

そこは、街灯や近所の家の明かりで夜でも明るく、安心できる道だ。

「あ……」

由香里は近くの公園のベンチに奈々が座っている事に気付き、立ち止まる。

奈々は寂しそうに1人でいた。

そんな奈々に由香里はゆっくりと近づく。

「奈々ちゃん、どうしたの？ そろそろ家に帰らないと、みんな心配するよ?」

圭介から事情を聞いているため、奈々がここにいる理由はある程度わかつている。

そんな理由から、由香里は自然と優しい声で話しかけた。

「ほら、一緒に帰ろうよ。もうすぐ圭介がケーキ買ってきてくれるよ」

「ケーキなんていらない」

奈々は由香里を見る事なく、顔を下に向ける。

「……奈々ちゃん?」

「サンタさんも来なくて良い! お父さんに会いたい!」

奈々の言葉を聞き、由香里は目に涙を浮かべる。

「……奈々ちゃんの気持ち、痛い程わかるよ。だけど、今は家に帰る」

「やだ! 帰りたくない!」

「何で?」

「帰ってもお父さんいないもん!」

「だけど、今日はせっかくのクリスマスイブなんだし……」

「クリスマスなんて嫌い!」

その時、奈々は突然立ち上がり、走り出す。

「あ、待って！」

まだ言いたい事があるため、由香里はすぐに奈々を追いかける。しかし、どういう訳か由香里は奈々に追いつくどころか、どんどん引き離されてしまう。

そして、ついに由香里は走る事をやめ、歩き始める。

「奈々ちゃん、あんなに足速いんだ……」

その時、奈々が道を曲がったため、由香里は再び走り出す。

由香里は奈々が曲がった先の道が行き止まりである事を知っているため、何とかそこで追いつこうと考えている。

そして、由香里はすぐに道を曲がり、行き止まりになった場所に着いた。

しかし、そこに奈々の姿はなかった。

「何で……？」

わき道もないため、なぜ奈々がいなくなったのかわからず、由香里は訳がわからなくなってしまった。

それでも由香里は呼吸を整えると、また奈々を捜す事にした。

ケーキ屋まで数十メートル付近のところまで来た時、圭介はここまで来た事を少しだけ後悔していた。

もしも今、ケーキ屋まで数百メートルあるとしたら、圭介はケーキを買わずに家を目指すつもりだった。

しかし、ここまで来て引き返す訳にもいかず、圭介は早足でケーキ屋の中に入る。

クリスマスという事もあって、周りにある商店街と同様に店の中も混んでいるが、暖房が効いている分、圭介にとっては天国のような場所を感じられた。

そのまま、店の中に長時間待機する事も考えたが、圭介は奈々の好きなケーキを買つと、すぐに店を出た。

「寒い……」

圭介はあまりの寒さに鼻をすすりながらそんな事をつばやいた。

しかし、つぶやいたところで寒い事に変わりはないため、圭介は早足で帰る事にする。

そんな圭介の目の前、商店街の途中に人だかりがあった。

「クリスマスツリーが倒れたんだってさ」

「マジで！？ 危ねえな」

「でも、クリスマスツリーが倒れるなんて……」

人だかりの横を通り過ぎる時、そんな会話が聞こえてきたため、圭介は何が起きたのか何となく理解した。

どうやら、商店街の中心にあるクリスマスツリーが倒れたようだ。

人が多く、倒れたクリスマスツリーを見る事は出来なかったが、本来なら遠くからでも見えるものが見えないという事からも、状況は理解出来た。

ただ、出来るだけ早く帰りたいという考えがあるため、圭介はすぐにその場を後にする。

気にならないといえは嘘になるが、クリスマスツリーが倒れたといった程度の話では止まる気になれなかった。

しかし、商店街から少し離れ、人気のない道に入った時、圭介は立ち止まる。

それは、道の真ん中に倒れている人がいたからだ。

「あの、大丈夫ですか？」

圭介は状況が飲み込めず、適当に声をかける程度しか出来なかった。しかし、なかなか起き上がらないため、圭介は肩の辺りを軽く叩いた。

「ん？」

圭介が肩を叩いた事により起きたのか、元々起きていたのかはわからないが、その人物はやつと反応を見せる。

「大丈夫ですか？」

「え……ああ」

「あの……」

「あ、俺カイト」

「いや、そうじゃなくて……」

圭介が知りたいのは名前ではなく、何故こんなところに倒れていたのかという事だが、面倒になってきたため聞かない事にした。

カイトはサンタクロースの格好をしていて、歳は圭介と同じぐらいに見える。

とにかく、普通の人とはどこか違って見えたため、圭介はあまり関わらないよう、すぐこの場を後にする事にした。

「俺、もう行きますね」

圭介はそれだけ言うと、足早に歩き出す。

「あ！」

その時、突然カイトが叫び声を上げたため、圭介はまた立ち止まる。

「バッジがない！」

カイトはそう言うと、圭介の方を見る。

「バッジ、盗っただろ？」

「は？」

「あのバッジは大事な物なんだよ。お願いだから返してくれよ」

「いや、ちよつと待てよ」

状況が飲み込めず、圭介は混乱してしまった。

「何か、なくなったの？」

「だから、バッジがないんだよ」

「とりあえず、俺は持ってないよ」

「ホント？ 隠してないか？」

「何で隠すんだよ？ 大体、盗ったなら、いちいち起こしたりしないで逃げるだろ？」

「ああ、そうか……」

カイトは圭介が持っていないと知り、ガツカリしたように肩を落とす。

「そんなに大切なものなの？ 誰かからのプレゼントとか？」

「そうじゃなくて……。とにかく一緒に探してくれないか？」

「どんなものなのかわからないで、探せる訳ないじゃん」

圭介の言葉にカイトはしばらくの間、考える様子を見せた後、口を開く。

「実は俺……サンタクロースで、あのバッジがないと何も出来ないんだよ」

「……ふーん」

そこまで聞いて、圭介はやはり関わるべきではないと考え、適当に返事をしてから歩き出す。

「あ、どこに行くんだよ？」

「寒いから帰る」

「一緒に探してくれよ」

「サンタなんだから、トナカイに頼んでそこら辺を飛び回れば良いだろ」

「だから、バッジがないと何も出来ないんだって」

「そのバッジって何なんだよ？」

「何って……サンタクロースならみんな持つてる物で、不思議な力を持った物で……」

カイトが説明に困った様子を見せ、圭介はため息をつく。

「その辺の設定、ちゃんと作っとけよ」

「作り話じゃない！　ただ、説明出来ないだけだよ！」

「何だよそれ？」

「持つてるのが当たり前の物を説明出来る訳ないだろ。簡単に言えば色々な事が出来て……」

「はいはい、わかったよ。それより、サンタってやっぱりたくさんいるんだ？」

圭介は無意識のうちに、カイトをバカにするような態度を取る。

「まあ、一人で世界中の人にプレゼントを配るなんて無理だしね」

「サンタクロース、信じてないのか？」

「信じるも何もサンタなんていないし」

「何でそう思うんだよ？」

「だって、煙突から入ってくるって言うてるのに煙突がない家にも

来るとか、大人の都合で設定変えられてんじゃない」

「確かにそうだけど……」

「それに、俺の家にはサンタが来た事なんてないし……」
「そこまで言っつて、圭介は何となく寂しい気分になった。」

「名前、何て言うの？」

「え？」

「名前」

「名前って……俺の？」

突然話が変わったため、圭介はすぐ答えられなかった。

「……俺の名前は圭介だよ」

「じゃあ、圭介。俺と一緒にバッジ探してくれないか？」

「は？」

「バッジが見つかったら、俺がサンタクローズだって証明出来るから」

「嫌だよ。寒いから家に帰るって」

「なあ、頼むよ。ないと先輩に怒られるんだよ」

「大体、何でここにいるんだよ？ みんな起きてるじゃん」

「今日が初めての仕事だから下見だよ。人間界がどんな感じなのか見たかったし」

「はいはい、そうですか」

相変わらず信じていない圭介は適当に返事をした。

「なあ、一緒に探してくれよ」

「何で寒い中、見ず知らずの人を助けないといけないんだよ？」

「そうだけどさ……」

「カイト！」

その声にカイトは慌てて声がした方を向く。

それに合わせ、圭介も視線を動かす。

「リナ！？」

そこには怒った表情の少女がいた。

「もう、何やってるのよ？」

「リナ、何でここがわかったんだよ？」

「とにかく、早く帰るよ。このままじゃ間に合わないよ」

リナと呼ばれている少女もサンタクロースの格好をしていて、カイトと同じ年のように見える。

カイトの話が真実だとすると、リナもサンタクロースの1人だと予想出来るが、カイトの話を信じていない圭介はそんな予想を立てる事もなかった。

そして、カイトがリナと話をしている隙に、圭介はそつとその場を後にした。

圭介がいなくなった事にカイトが気付いたのは、数秒後の事だ。

しかし、既に圭介は早足で遠くに行ってしまった。

「あ、行っちゃったよ」

「……誰？」

圭介の後姿を見ながら、リナは小さな声で尋ねた。

「ああ、圭介とか言ってたよ」

「そうじゃなくて、人と話しちゃいけないってあれ程言われたじゃない！」

「そう怒るなよ。俺達がサンタクロースだなんて信じてないから」

「自分がサンタクロースだなんて言ったの!？」

「しょうがないだろ。一緒にバッジを探してもらおうとしてたんだから」

そこで、リナは険しい表情になる。

「……今、何て言った？」

「あ……」

「バッジなくしたの!？」

「……どっかに落としたみたいで」

「早く言いなさいよ！ 誰かが拾っちゃったらどうすんのよ!？」

リナに怒られ、カイトは顔を下に向ける。

「どこで落としたのか、わからないの？」

「わかってたら、取りに行ってるよ」

「何で落としたのよ？」

「知らないよ。そういえば、さっきソリから落ちたんだっけな……」
カイトの言葉にリナは呆れた様子を見せる。

「1度戻って、長に探してもらおうよ。その方が早いだろうし」

「そんな事したら、先輩にばれちゃうよ」

カイトの言った先輩というのはリナの先輩でもあるレイアの事だ。
レイアはとても厳しく、だらしないカイトはよく怒られている。

「もうみんな知ってるよ」

「え!？」

「だって、長にカイトがいる場所を聞きながら、ここまで来たんだから」

リナの言葉にカイトは肩を落とす。

「まあ、途中で長の声が聞こえなくなったから、探すのに苦労したけどね」

「絶対、先輩に怒られる」

「怒られるだけで済めば良いけどね。でも、何で長の声が聞こえなくなっただらう……?」

リナはそう言いながら、手を上げる。

「バッジの場所、長に聞いてくるけど、戻ってくるまでカイトも探してよ」

「ああ、わかった」

その時、リナの目の前にトナカイとソリが出現した。

「人気がなくて良かった。それじゃあ、行ってくるね。なるべく人と話さないようにしなさいよ」

「ああ、わかったよ」

リナはソリに乗ると、そのまま空へ飛んでいった。

「探せって言っても、どうやってだよ？」

リナが去った後、カイトは小さな声でつぶやいた。

人が住む世界とサンタクロースが住む世界は1本の道で繋がっている。

普段、その道は塞がっていて通れないが、クリスマススイブとクリスマスの日だけは自由に行き来出来る。

最も、行き来出来るのはバツジを持った者だけだ。

クリスマススイブの今日は、サンタクロースにとって最も忙しい日になる。

子供達に配るプレゼントを用意し、それをキレイに包む作業を夜までに終わらせ、時間になれば太陽と競争しながら順番にプレゼントを配らなければならない。

サンタクロースは大勢いるが、その事を考えれば決して多い人数ではない。

そんな、ただでさえ忙しいサンタクロースにとって、カイトを捜さなければならぬという事は大変だ。

「全く、帰ってきたら、うんと叱ってやる」

レイアは独り言を言いながらカイトとリナの分のプレゼントを包んでいる。

「おい、長の話は聞いたか？」

その時、同僚のサンタクロースに声をかけられ、レイアは手を止める。

「え、どうしたの？」

「とにかく来てくれないか？」

本音を言えば、手を止める余裕はないが、レイアは長のもとに向かう。

そこには大勢のサンタクロース達が集まっていた。

「どうしたの？」

「大変な事になってるんだ」

「大変って……」

「みんな、静かに！」

長の声を聞き、騒いでいたサンタクロース達は話を止める。

「カイトが人間界に行ってしまったという話はもう聞いておるな？」
長は言い辛いのか、少しだけ考え込んでいる様子を見せる。

「……カイトが、バッジを落としたようじゃ」
長の言葉に、全員が息を飲む。

「その事と何か関係があるのか、人間界と繋がっている道が結界の
ようなもので塞がっておるのじゃ」

「ちょっと待って下さい！ それは、人間界に行けないという事
ですか？」

長の言葉にレイアは慌てて尋ねた。

「ああ、そうじゃ」

「え、そんな……」

「それじゃあ、どうするんですか!?!」

長の言葉に他のサンタクロース達は騒ぎ始める。

そんな中、レイアだけは冷静にどうしようか考えていた。

「すみません、外にいるリナやカイトと話をすることは出来ますか？」

「わしからの声は届かないようじゃが、結界があるところなら、直
接話が出来るはずじゃよ。丁度、リナがこっちに向かっておる。話
がしたければそこで待てば良い」

「わかりました。みんな聞いて！」

レイアの大きな声で、サンタクロース達は騒ぐのをやめた。

「私達は道が開いたらすぐにでも出発出来るように準備をしようよ
！」

「しかし、このままでは……」

「私はこれから結界があるところまで行ってリナを待ちます。今、
人間界にいるのはリナとカイトだけです。こうなったら2人にどう
にかしてもらえないと思います」

「確かにそれしかないな」

他のサンタクロースもレイアの意見に賛成の態度を見せる。

「私から今どんな状況なのか直接話します。後は2人を信じて、私
達は私達が出来る事を……」

「ああ、わかった。ただでさえ遅れているんだ。みんな、急いで準備を進めるぞ！」

リーダー的存在であるサンタクロースがそう言うと、サンタクロース達は一斉に準備を再開する。

「レイア達の分まで俺達がやる。レイアはすぐにも向かってくれ」「ありがとうございます」

レイアは礼を言った後、すぐソリに乗った。

そして、レイアは結界がある場所を目指して移動を始めた。

「ただいまー」

最終的には早足どころか、全力疾走してきた圭介は肩で息をしながら家に入る。

「おかえり。奈々を見なかった？」

「え、帰ってないの？」

既に午後5時を過ぎ、辺りはすっかり暗くなっている。

奈々がこの時間に家にいないのは珍しい事だ。

「何だよ、せつかくケーキ買ってきたのに」

圭介は少しだけ不機嫌そうに言いながら、ケーキが入った箱を袋から取り出してテーブルに置く。

「奈々、何かあったのかしら？」

「大丈夫だよ」

「でも、父さんの事があつたばかりだし」

「そんな事言うなよ！」

圭介が突然叫んだため、母は驚いた様子を見せる。

「ああいった事は連続して起こる訳ないんだよ。確率的に考えたってそうじゃん」

「……そうね」

「心配なら、俺が捜してくるよ。ケーキは冷蔵庫に入れておくれ」

圭介はテーブルに置いていたケーキの箱を持ち、冷蔵庫に入れようとしたが、そこで少しだけ違和感を覚える。

「暗くなってきたから、圭介も気を付けてね」

圭介は母の言葉に返事をする事なく、ケーキの箱を開ける。

「あれ？」

「どうしたの？」

圭介の様子を見て、母も箱の中に目をやる。

「ケーキがなくなってる」

箱の中には何も入っていないかった。

「元々入ってなかったのかしら？」

「いや、さっきまで重さみたいのがあったし……」

「あら、それじゃあ不思議ね」

その時、家のチャイムが鳴ったため、圭介は玄関に向かう。

「こんばんは」

ドアを開けると、そこには由香里が立っていた。

「奈々ちゃん、帰ってる？」

「え……ただけど？」

「さつき、奈々ちゃんを見かけて一緒に帰ろうとしたんだけど、見失っちゃって……」

「え？」

由香里の言っている事がよくわからず、圭介は混乱してしまった。

「詳しく話してくれない？」

「奈々ちゃん、クリスマスが嫌いだって。あと、家に帰ってもお父さんがいないなら、帰らないって」

「何で、無理やりでも連れて来なかったんだよ？」

「だって、逃げちゃったから」

「追いかけるよ」

「追いかけたよ。だけど見失っちゃったの」

圭介はその部分だけ納得がいかなかった。

どう考えても、中学1年生の由香里が小学1年生の奈々を見失うとは思えない。

「由香里……足、怪我してるの？」

「いや、してないよ」

「じゃあ、何で見失うんだよ？」

「わかんないよ。私だって不思議なんだから。行き止まりの道に行つたはずなのにいなくなっちゃったし」

「もう、とにかく捜しに行くよ」

圭介はこれ以上、由香里と話をすることは無駄だと思い、とりあえず奈々を捜しに行く事にした。

「由香里、最後に奈々を見た場所、教えてくれないか？」

「うん、わかった」

「母さん、奈々を捜しに行ってくるね」

「うん、気を付けてね」

母の返事を聞いた後、圭介は外に出る。

「たく、こんな寒い中、どこに行つたんだよ？」

圭介はそんな文句を言いながらも、早足で歩き出した。

リナは他のサンタクロース達が待つ世界に近づいていた。

本来ならここに来る事なくカイトがなくなったバツジを探したかったが、長に話を聞きたいという事もあり、リナは大急ぎでここまでやってきた。

その時、リナは遠くにレイアの姿を見つける。

「何で、先輩がいるんだろ？」

何も知らないリナはそのままの速度でレイアに近付いていく。

「リナ、ストップ！」

「え！？」

レイアに突然そう言われ、リナは慌ててしまったが、何とか止まる事が出来た。

「どうしたんですか？」

リナは一瞬、訳がわからなかったが、すぐにガラスのようなものが道を塞いでいて通れなくなっている事に気付く。

「何で塞がってるんですか？」

「リナ、すぐにカイトがなくなったバツジを探して」

「え？」

「多分、ここが塞がってるのはバツジのせいだと思うの。誰かがバツジを拾って、そのせいじゃないかって」

レイアの言った事が理解出来ず、リナは固まってしまふ。

「ほら、早く行きなつて！ 今、人間界にいるサンタクロースはリナとカイトだけなんだから、2人でこれを何とかしないといけないんだよ？」

「え、でも誰が持つてるのか……」

「それは、このガラスみたいのが結界になってるみたいで私達にもわからないの。でも、とにかくバツジを探さなきゃいけないの」

「それに、出発の時間はもうすぐだし……」

「だからこそ、すぐに見つけないといけないの。私達はここが開いたらすぐにでも出発出来るように準備しておくから」

「そんな事……」

「いちおう、長の水晶でリナ達の様子はわかるの。だけど、こつちから直接話をしたりは出来ないし、バッジがどこにあるかもわからない」

リナはレイアの話真剣に聞き、今の状況を少しでも理解しようとする。

「時間がギリギリでも、2人がバッジを見つけてここが開いた瞬間に私達は出発するから、何とかバッジを見つけて」

レイアの言葉にリナは少しだけ考えた後、頷く。

「今、カイトは……さっきいた場所から、近くの商店街の方に向かってるみたい」

「わかりました。すぐにカイトを見つけて、一緒にバッジを探してきます」

「リナとカイトなら大丈夫だよ。私の後輩なんだから」

レイアの言葉にリナは少しだけ笑った後、すぐにバッジを探しに向かった。

「本当に奈々はここに行ったのかよ？」

行き止まりになった場所まで案内され、圭介は固まってしまった。

「本当だよ」

「ここに行つたならいるはずだろ？」

「それがいなかったんだって」

圭介は相変わらず由香里の言っている事に納得がいかないでいる。

「多分、見間違えたんだろ」

「違うよ。本当に消えちゃったんだから」

「ああ、もうわかったよ。とにかく別の場所を捜そう」

圭介はここにいなくてもしょうがないと思い、別の場所を捜す事にする。

「あ、奈々ちゃんいた!？」

その時、明の声が聞こえ、2人は慌てて振り返る。

「明、どうしたの？」

「おばさんから事情を聞いたんだよ」

「それで捜してくれてるのか？」

「そうだよ。結局見つかってないけど……」

「いや、ありがとう」

圭介は心から礼を言った。

「それじゃあ、分かれて捜そうか」

「良いけど、由香里は奈々を見つけても逃げられるから1人にしない方がよいよ」

「もう、うるさいなー」

圭介からバカにされ、由香里は少しだけ怒った顔になる。

「明、由香里と一緒にもう1度この辺を捜してくれないかな？ 俺は商店街の方に行くってくるから」

「うん、わかった」

「それじゃあ、後で」

圭介はそう言うと、さっき歩いた道を逆方向に走っていく。

「どこにいたんだよ？」

どこに奈々がいるかわからないため、圭介は辺りを確認しながら進む。

「あ……」

その時、圭介はカイトを見つけた。

相変わらず、バッジを探しているのか、カイトは下を見ながらうろろしている。

圭介は話しかけないまま通り過ぎようとしたが、少しだけ考えた後、立ち止まる。

「えっと、カイトだっけ？」

圭介が呼ぶと、カイトは顔を上げた。

「ああ、圭介だっけ？」

「ちよっと頼みがあるんだ」

「……何かあったの？」

カイトは圭介の様子からただ事ではないと感じてくれたようだ。

「奈々が……俺の妹がいなくなっちゃったんだ。1人にいる小学1年生の……わかんないか、小さな女の子を見かけたら、家に帰るよと言ってくれないかな？」

「でも……」

「俺も奈々を捜すのと一緒にバッジも探す。だから、頼むよ」

「……わかった」

カイトの返事に圭介は笑顔を見せる。

「ありがとう。それじゃあ、俺は行くよ」

圭介はまた走り出したが、すぐに立ち止まる。

「なあ、聞いても良いかな？」

「え？」

「カイトがなくなしたっていうバッジ、具体的にどんな事が出来るんだ？」

「ああ……圭介なら良いかな」

カイトは少しだけ考えた様子を見せた後、話を始める。

「普段、俺達はトナカイとソリを出したりしてるけど、他にも色々出来るよ」

「姿を消す事って出来るのか？」

「え？」

「あと……」

そこで、圭介はある推測を立てる。

それは、カイトの言っている事が真実だという前提から生まれたものだ。

「買ったケーキを消したり……」

そこまで話し、圭介は確認する必要がある事を思い出す。

「カイト、ちょっと一緒に来てくれないか？」

「さっきから何なんだよ？」

「良いから来てくれよ」

「……わかったよ」

そのまま、圭介とカイトは商店街の中心までやってきた。先程に比べれば人は減っていたが、それでも十数人の人が不思議そうに倒れたクリスマスツリーを見ている。

「何だ、これ？」

「カイト、ちよつと確かめたい事があるから、ここで待っていてくれ」
「ああ、わかった」

カイトは倒れたクリスマスツリーをじつと見始める。

圭介はそんなカイトの様子を少しだけ気にしつつ、ケーキ屋に向かう。

その理由は、ケーキが突然消えた事が気になったからだ。

圭介がケーキ屋の前まで来た時、店の中は騒ぎになっていた。

「だから、ケーキが入ってなかったのよ！」

「いえ、でも……」

「一体、どういう事なんですか？」

入った瞬間、そんな声が聞こえ、圭介は固まってしまった。

「あ、すみません。何があったんですか？」

「それが、買ったケーキが突然消えちゃってここに来ただけど、みんなも同じ事が起こってるみたいで……」

圭介は近くにいた人からそれだけ聞くと、すぐに店を出て行った。

カイトは倒れたクリスマスツリーをじつと見ていた。

「これって……」

その時、嫌な考えが頭に浮かび、カイトは首を振る。

「そんな事あるわけないし」

そう言いつつも、カイトの頭から、その考えが消える事はなかった。

「カイト！」

その時、圭介が走って戻ってきた。

「あ、圭介。このツリー……」

「悪い、ちよつと来てくれないか？」

「おい、さつきから何なんだよ？」

「ここで話すとまずいだろ」

圭介に手を引かれ、カイトは人通りの少ない道に移動する。

「……さつきのクリスマスツリー、どう思った？」

圭介の質問にカイトは真剣な目になる。

「……おかしな倒れ方だと思っただよ」

「バッジを使ってやった事かな？」

「え？」

サンタクロースを全く信じていない圭介の質問とは思えなかったため、カイトは驚いてしまった。

「あと……」

「あ、カイト！」

その時、リナが来たため、圭介の言葉は中途半端なところで遮られてしまった。

「もう、人と話しちゃいけないって言ったでしょ？」

「圭介の妹で、奈々って子を捜す代わりに、圭介もバッジ探してくるって」

「もう、勝手な事しないでよ」

「それより、バッジの場所わかった？」

「あ、それは……」

リナは圭介がすぐそばにいたため、話をしても良いか少しだけ迷っている様子を見せる。

しかし、結局リナは話を始めた。

「バッジ、誰かが拾ったみたいなの」

「え!？」

「あと、私達の世界と人間界を繋いでいる道が結界みたいなもので遮られちゃってるの」

「何で、そんな事に……?」

「カイトがバッジを落としたせいでしょ。でも、何でサンタクロースが来れないようにしたんだろう?」

「それより、間に合うのかよ？」

「私達がバッジを見つけて、結界みたいなものを解けば、すぐにもみんな出発してくれるから」

カイトは自分が大変な事をしてしまったと自覚し、どうにかして解決する方法を模索する。

「とにかく、誰がバッジを拾ったかわからないけど、探すよ」

「ああ、わかった。圭介、そういう事だから……」

「ちょっと待って、少しだけ考えさせて」

すぐに出発しようとしたが、圭介に呼び止められ、カイトとリナは少しだけ待つ事にする。

「倒れたクリスマスツリー、消えたケーキ、来れなくなったサンタ、そして突然姿を消した……奈々」

そこで、圭介は確信を持ったような目を見せる。

「なあ、そのバッジで死んだ人に会う事は出来るの？」

「え？」

「良いから、答えて」

圭介が何を考えているのかわからなかったが、カイトはその質問に答える事にする。

「多分、無理だと思うよ。あのバッジは人が持つと俺達が持つよりも強い力を発揮するらしいけど、そこまで強い力は持ってないし」
そこで、圭介は険しい表情になる。

「……もしも2人の言ってる事が本当だとしたら、奈々がバッジを持つてると思う」

「え？」

「サンタがいるとか、不思議な力だとか、そんなのはまだ半信半疑なんだけど、百歩譲って本当だとしたら、奈々が持つてるとしたか考えられない」

圭介の話に根拠はないが、カイトとリナは信じる事にする。

「奈々ちゃんはどこにいるの？」

「それがわかってたら、とっくのとうに見つけてるよ」

「行きそうな場所とかわからないの？」

「そんなの……ある」

圭介は何かを思い出したような様子を見せた。

一年以上も前の事になるが、奈々がどこかへ行ってしまつて帰つてこなかった事があつた。

圭介と父は捜しに出掛けたが、奈々はなかなか見つからなかつた。

「奈々、どこに行つたんだらう？」

「圭介、奈々がよく行くところはどこか、知らないか？」

「思い当たるところは全部捜したよ」

既に随分遠くまで来ていたが、奈々はどこにもいなかった。

それでも、圭介と父は息を切らせながら奈々を捜し続けた。

そして、圭介はある公園で奈々を見つけた。

「あ、奈々！」

「ここにいたのか……」

圭介の声を聞き、父も奈々を確認した。

しかし、奈々は圭介達に気付いても、ただ下を向いているだけだつた。

「奈々、どうしたんだ？」

そんな奈々に父は優しく声をかけた。

「……ごめんなさい」

「ん？」

「お母さんが大切にしていたネックレス、なくしちゃつたの」

奈々は小さな声で言った。

「遊んでたらどこかに行つちやつて……」

「大丈夫だよ。お父さんも一緒に探してあげるから」

「でも、見つからなかつたら……」

「その時はお父さんと一緒にお母さんに謝れば良いんだよ」

父の言葉に、奈々は少しだけ考える様子を見せた後、頷いた。

「だから、一緒に帰ろう」

「……うん」

奈々は泣きながら返事をした。

「それにしても随分遠くまで来たんだな」

父が感心したように言ったが、奈々は特に何も言わなかった。

「奈々？」

「ん？」

「辛い事があつた時、家に帰りたくない時、そんな時に奈々が家に帰ってこなかったとしても……」

父は奈々の頭をなでながら言った。

「こつやってお父さんが迎えに来るから」

「……うん、わかった」

奈々は涙を拭きながら頷いた。

「あそこかもしれない！」

圭介には、他に心当たりがなかった。

だからこそ、あの場所にいると確信に近い気持ちを持てた。

「もしかしたら、あの場所で父さんを待ってるのかも」

「案内してくれる？」

「ああ、わかった。ここから遠いけど、ついてきて」

「あ、ちよつと待って」

圭介はすぐに走り出そうとしたが、リナが呼び止めたため、立ち止まる。

そして、リナは手を上げ、トナカイとソリを出現させた。

「これに乗って」

「え……？」

「良いから早く乗って！ カイトも乗りなさいよ」

「わかってるよ」

サンタクロースについてはまだ半信半疑だったため、圭介は混乱してしまっただが、恐る恐るソリに乗った。

「それじゃあ、行くよ」

リナがそう言うと同時にソリはトナカイに引かれて宙に浮く。

「うわ、すげえ！」

圭介は驚きのあまり、声を上げた。

「圭介君、案内してくれるかな？」

「あ、はい」

圭介は動揺していたが、簡単に目的地を説明する。

「わかった、すぐに着くよ」

場所を確認すると、ソリは勢いよくそこに向かって飛んでいく。

「……なあ、聞いても良いかな？」

「何？」

移動中、圭介は気になっていた事を尋ねる事にした。

「サンタって全ての人の家に行く訳じゃないのかな？」

「……うん、そうだよ」

「そうだよね。俺の家には来た事ないし」

圭介は少しだけ残念そうに言った。

そんな圭介に、カイトは笑顔を見せる。

「サンタクロースがいる家には行かないんだよ」

「え、どういう事？」

「別に大した事じゃないよ。つまり……」

「もうすぐ着くよ」

カイトの答えを聞いていなかったが、目的地に着いたため、圭介は奈々を捜すため、下を見る。

「ここで良いんだよね？」

「うん、ありがとう」

その時、圭介は奈々を見つける。

「あ、いた！」

「ホント！？ それじゃあ、すぐに下りるね」

リナがそう言くと、すぐにソリは下りていった。

そして、ソリが地面の近くまで下りたところで、圭介はソリから飛び降りて奈々のもとに向かう。

「あ、ちよつと待ってよ！」

リナがそう言う間に、カイトもソリから飛び降り、圭介を追いかけってきた。

「もう、みんな勝手に動かないの！」

リナの叫び声が聞こえたが、圭介とカイトは足を止めなかった。

「奈々！」

圭介が呼ぶと奈々は顔を上げる。

「奈々、心配したんだぞ」

「来ないでよ」

「え？」

「お父さんが迎えに来るまで待つてるんだから、お兄ちゃんも家に帰っててよ！」

奈々の言葉に圭介は少しだけ考えてしまった。

「……奈々、母さんだって心配してるんだ。すぐに帰ろうよ」

「嫌だ！ お父さんを待つてる！」

「奈々！」

「来ないでよ！」

その時、圭介は衝撃を受け、数メートル後方まで吹っ飛んでしまった。

「何だ今の？」

「バツジを持つてる」

意味がわかっていない圭介にカイトは静かな声で言った。

カイトの言葉を聞き、圭介は奈々が何かを持っている事に気付く。

「奈々、その持つてる物は何？」

圭介の質問に奈々は答えない。

「奈々、それはこのカイトって人の物なんだ。だから、返してあげよ？」

「嫌だ！」

圭介はなかなか奈々に近付けず、困ってしまった。

「……ちゃんと話がしたくても、これじゃ近付けもしないよ」

その時、リナがやってきた。

「カイト、もう時間がないよ。そろそろ結界を解かないと間に合わなくなっちゃう」

「わかってるよ！」

カイトは怒った様子で言った。

「でも、どうするんだよ？」

「とにかく、やるしかないでしょ」

リナはそう言うと、奈々に近づく。

「奈々ちゃんだよな？」

リナは優しい声で尋ねた。

「奈々ちゃんが持っているのは、私達……サンタクロースのものなの」

「サンタさんの？」

「そう。サンタクロースって1人じゃなくてたくさんいるのよ。私もサンタクロースなの」

リナはそう言いながら少しずつ奈々に近付いていく。

「そのバッジがないと、みんなにプレゼントを配れないの。だから、返してほしいの」

「……お父さんに会いたい」

奈々の言葉にリナは足を止める。

「サンタさんだったら、お父さんに会わせてくれる？」

「それは無理だけど……」

「だったら、返さない！ プレゼントなんていらないもん！」

その時、カイトがリナの腕を引っ張る。

「リナ、1回下がろう」

「だってもう、時間が……」

「リナ、俺に任せてくれないか？ 圭介、手伝ってくれないか？」

「ああ、言われなくても手伝うよ」

「私はどうすれば良いの？」

「バッジを貸してほしい」

「……わかった」

カイトの言う通り、リナはすぐに自分のバッジをカイトに渡す。

「俺はどうすれば良いんだよ？」

「圭介は自分の思った事を言えば良いんだよ」

「近付けもしないのに？」

「それは俺が何とかする。時間がないから、急ぐよ」

カイトはそう言うと、奈々の方に顔を向ける。

「奈々ちゃん、聞いてほしい……」

カイトは、ゆっくりとそう言った。

「お父さんに会わせる事は出来ない」

「何で？」

「だって、奈々ちゃんはお父さんがいなくても大丈夫だから」

「大丈夫じゃないよ！」

その時、カイトは圭介の腕をつかむ。

「圭介、俺が圭介を奈々ちゃんの近くまで移動させる」

「え？」

「やっぱり、最後は圭介が言わないとダメだから」

カイトは小さな声で圭介にそう言った。

「お父さんに会いたい！」

「奈々ちゃんには……圭介がいるじゃないか」

カイトは優しい声で言った。

「圭介は寒い中、奈々ちゃんを捜したんだよ？ 全力で走って、必

死に奈々ちゃんの事を捜したんだよ？」

奈々はカイトの言葉を黙って聞いている。

「奈々ちゃんには、そんなお兄さんがいるんだ。奈々ちゃんの事を

本気で心配してくれるお兄さんがいるんだ」

その時、カイトは圭介に触れると、一瞬で圭介を奈々の近くに移動

させる。

「……お兄ちゃん」

奈々は圭介に目を向ける。

そんな奈々を前にして、圭介は真剣な表情で口を開く。

「奈々、辛い事があった時、家に帰りたくない時、そんな時に奈々

が家に帰ってこなかったとしても……」

圭介は父の言葉を思い出しながら言った。

「こうやって、お兄ちゃんが迎えに来るから」

圭介の言葉を聞き、奈々の目に涙が溢れる。

「それじゃあ、ダメかな？」

「……ううん」

奈々は泣きながらも笑顔を見せる。

「お兄ちゃんが迎えに来てくれるなら、それで良い」

奈々の言葉に圭介も笑顔を見せる。

「それじゃあ、そのバッジを返してあげよ？」

「うん」

そして、奈々は素直にバッジを圭介に手渡した。

「道が開いたぞ！」

その言葉と同時にサンタクロース達は一齐に人間界へ向かう。

既に出発の時間は大幅に過ぎていているが、大急ぎで行けば間に合う時間だ。

「レイア！」

すぐに出発しようとしたレイアを長は呼び止める。

「……カイトが迷惑をかけてしまい、すいませんでした」

「何を言っておるのじゃ？ カイト達はレイアの教え通り、立派なサンタクロースではないか」

「え？」

「わしが君に言った事、覚えておるかな？ サンタクロースはプレゼントを配る事が本当の仕事ではない」

「あ、覚えていますよ」

長の言葉にレイアは笑顔を見せる。

「それじゃあ、私も行きます。3人分のプレゼントを積んでいるので速度は落ちると思いますから」

「ああ、気を付けてな」

レイアは静かに頷くと、すぐに出発した。

圭介は奈々から受け取ったバッジをじっと見ていた。

「圭介、ありがとう」

「ああ、ちよつと待って」

バッジを受け取るうとしたカイトを圭介は止める。

「何だよ？」

「奈々がやった事、元通りにしたいんだけど、どうすれば良いかな

「？」

「そう思ったんだったら、もう元通りになってるよ」

「あ、そうなんだ。だったら返すよ」

圭介はそう言いながらカイトにバツジを返す。

「カイト、リナ、急ぎな！」

その時、空から声が聞こえ、カイトとリナは上を見る。

「あ、先輩だ！」

「え、何でこんな早く来るんだよ!?!」

カイトは嫌そうな顔をする。

「カイト、リナ、早くプレゼントを配りに行くよ」

「え、あの……?」

「カイト、帰ったらうんと叱るけど、今は仕事して」

「でも、あんな騒ぎを起こしたのに……」

カイトの言葉にレイアは笑う。

「いつも言ってるだろう? サンタクロースはプレゼントを配る事が本当の仕事ではない」

レイアは長から言われた言葉をいつもカイト達に言っている。

「幸せを配る事が本当の仕事だって」

「え?」

「カイトは立派なサンタクロースだよ」

レイアの言葉の意味がわからず、カイトは首を傾げる。

「俺達に幸せを配ったって事だよ」

圭介がそう言うと、納得したようにカイトは笑顔を見せる。

「とにかく、今はプレゼントを配るよ」

「あ、はい」

レイアに言われ、カイトとリナはそれぞれのトナカイとソリを出現させる。

「それじゃあ、行くよ」

レイアはカイト達が配る分のプレゼントをそれぞれのソリに乗せると、すぐにその場を後にする。

「圭介、何かほしい物あるか？」

「え？」

急がなければならなかったが、カイトは圭介に礼がしたかった。

「今日だけは特別に俺達からプレゼントしてやるよ」

カイトの言葉に、圭介は少しした後、首を振る。

「いや、いらない」

「何だよ？ 遠慮しなくて良いのに」

「俺のほしい物……奈々と一緒だから」

その時、カイトは圭介の弱さを見た気がした。

「カイト、早く行くよ」

「ああ、わかった。圭介、ありがとな」

カイトは簡単に礼を言つと、すぐに空へ向かった。

カイト達がいなくなり、圭介はため息をつく。

「家まで送つてつてくれれば良いのに、気が利かないな。しょうがないから歩いて帰るか」

「お兄ちゃん、おんぶしてよ」

「何だよ？ 自分で歩いてくれよ」

「今日だけだから良いじゃん」

「たく……」

圭介は文句を言いながらも奈々をおんぶする。

「疲れたらすぐに降ろすからな」

圭介はそう言ったが、心の中では全く正反対の事を考えていた。

たとえ疲れたとしても、圭介は家まで奈々をおんぶしていきたいと思っていた。

「もう、心配したんだよ」

「ごめんなさい」

家に帰つてくると、母と由香里と明が出迎えた。

「何で由香里と明はここにいるんだよ？」

「私がここで待つように言ったのよ。圭介が奈々を見つけてくるからって」

母の言葉に納得し、圭介はテーブルに着く。

「私、サンタさんに会ったんだよ！」

「ホント？ 良かったわねー」

奈々と母の会話を聞きながら、圭介は疲れたように息を吐く。

「圭介、明日一緒に買い物行かない？」

「え？」

由香里の提案に圭介はどうしようか考えた。

「クリスマスプレゼント買ってよ」

「サンタさんをお願いしろよ」

「何だよ、せっかくなんだからデートしてこいよ」

明の言葉に由香里はまた顔を赤くする。

「デートじゃないよ」

「デートじゃねえかよ」

「そんなのどっちでも良いよ」

圭介は疲れていたため、面倒と思いつつながら適当な返事をした。

「ねえ、とにかく行こうよ」

「わかった、行くよ……。あ、そうだ！」

圭介はある事を思い出し、テーブルにあったケーキの箱を手取る。

「ケーキ、入ってないでしょ？」

母の言葉を無視して、圭介は箱を開ける。

「じゃあ、みんなでケーキ食べようか」

箱の中には大きなケーキが入っていた。

「あら、どうしてかしら？」

母は意味がわからず首を傾げる。

そんな母の様子を見て、圭介は少しだけ笑った。

夜遅くまで簡単なパーティーをした後、圭介はすぐにベッドで横になっ

様々な事があり、すっかり疲れてしまったため、圭介はすぐにも寝たいと思っている。

しかし、まだ寝る訳にはいかなかった。

数日前、物置の中にプレゼントが入っている事を既に確認している。そして、圭介はクリスマススイブの夜、そのプレゼントを奈々の枕元に置こうと考えた。

今まで父がしていた仕事を引き継ぐという訳ではないが、圭介はとにかくそうしたいと思っていたのだ。

「奈々はもう寝たかな？」

既に夜の12時を過ぎているため、圭介はプレゼントを取りに行こうとベッドから降りる。

そして、部屋のドアを開けようとした時、誰かがドアを開けたのか、自動的にドアが開く。

「え？」

「何だ、圭介はまだ起きてたのか？」

そこに立っていたのは父だった。

「夜更かししちゃ、ダメだろ」

父はそう言った後、持っていた物を後ろに隠す。

「いや、これは違うんだよ……」

「何で父さんがいるの？」

「だから、違うって言うてるだろ。ちょっと気になったから様子を見に來ただけだよ」

そう言うと、父は部屋を出て行こうとする。

「あ、待ってよ！」

圭介が呼び止めると、父は立ち止まる。

「どこにも行かないでよ。ずっとここにいてよ」

父は圭介の言葉に対して、笑った。

「何を言ってるんだよ？」

「だって俺、父さんがいないと不安で……」

圭介はいつの間にか泣き出してしまった。

圭介はずっと平気な振りをしていた。

それは、母や奈々に悲しんでいる姿を見せたら、さらに2人を悲しませてしまうという考えがあったからだ。

しかし、本当は父が死んだ事を誰よりも悲しんでいた。

そんな我慢してきた気持ちが一気に溢れてきたかのように、涙は止まらなかった。

「おい、しっかりしろよ。もう中学生なんだぞ」

父は圭介の頭を撫でる。

「それに、父さんは圭介達のそばにずっといるよ」

「え？」

「圭介達の事をいつも見てるよ」

「ホントに？」

「本当だよ」

父の言葉を圭介は信じる事が出来た。

「だから、寝なさい。夜更かししちゃダメだろ」

「うん、わかった」

圭介はそう言うと、ベッドに戻る。

「父さん……」

部屋を出て行こうとした父に圭介はもう1度だけ声をかけた。

「俺、父さんがいなくても、頑張るから。あと……」

圭介は少しだけ考えてから口を開く。

「ありがとう」

それは、圭介がずっと言いたくて言えなかった言葉だ。

いつか言おうと思い、言えなかった言葉だ。

そして、父が死んでしまい、一生言えない言葉になるはずだった。

そんな言葉を、圭介は最後に言う事が出来た。

その事に安心したのか、圭介はすぐ眠ってしまった。

朝、目を覚ますと圭介はすぐに飛び起きる。

「夢……?」

圭介はそう考えると、少しだけ残念になり、ため息をつく。

「お兄ちゃん！」

その時、奈々がドアをノックする事なく、圭介の部屋に入ってきた。奈々は大きな熊のぬいぐるみを抱えている。

「サンタさん、来てくれたよ！」

「え？」

その時、圭介は昨夜、奈々にプレゼントを渡し忘れた事を思い出す。そして、同時に何故、奈々がプレゼントを持っているのか疑問に思った。

「お兄ちゃん、どうしたの？」

「いや……」

そう言いながら、自分の枕元を見て、圭介は固まってしまった。

そこには、昨夜父が持っていた、あの小包が置いてあった。

圭介はそれを確認すると、すぐに小包を開ける。

そして、中に入っていた野球グローブを取り出した。

「お兄ちゃんのところにもサンタさんが来たんだね！」

「いや……」

圭介はその時、カイトが言っていた言葉の意味がわかった気がした。

「サンタクロースがいる家には行かないって……そういう事か」

「え？」

「いや、何でもない」

圭介はそう言った後、笑い出す。

「何があったの？ 教えてよ」

「いや、何でもないって」

圭介は奈々からいくら聞かれても答えようとはしなかった。

「そっだ、由香里と買い物行くんだっ」

「待ってよー」

圭介は奈々から逃げるようにすぐ支度をすると、外に出た。

当然、外は寒かったが、圭介は特に文句を言う事なく、由香里の家に向かう。

その時、圭介は背後に誰かの気配を感じて、振り返る。しかし、そこには誰もいなかった。

「……最高のクリスマスプレゼント、ありがとう」
誰もいなかったが、圭介は笑顔で礼を言った。
そして、前を向くと圭介はまた歩き出した。

その時、2人のサンタクロースが飛び去った事に圭介は気付かなかった。

T H E E N D

小さな養護施設。

そこに1人の少年がいる。

名前は浩之。^{ヒロコキ}

親元から離れて暮らす子供達はやはりどこかネガティブな心を持つ事が多い。

しかし、浩之はとても明るい少年だ。

性格は素直で、友達思いな部分もある。

浩之はそんな少年だ。

しかし、時々浩之はみんなの輪から離れ、1人でいる時もある。

そんな時の浩之はいつもとは違い、寂しげな表情を見せる。

ここでボランティアとして手伝いをしている、由梨^{ユリ}は廊下を移動中、1人でいる浩之を見つけた。

「浩之君、どうしたの？ みんなと一緒にクリスマスパーティーの準備しようよ」

今日は12月24日。

この養護施設でも今日と明日にかけてクリスマスパーティーが行われる事になっている。

「1人でいたって楽しくないでしょ？」

由梨はそう言うと、笑顔を見せた。

「ほら、一緒にみんなのところに行こうよ」

「うん、わかった」

浩之はいつも通り、素直に返事をした。

そんな浩之を見ると、由梨はいつも不安な気持ちになる。

それは何故なのか、由梨にもわからない事だ。

ただ、そんな浩之が時々かわいそうに見える時があった。

「もうクリスマスだね」

「……僕、クリスマス嫌い」

「え？」

「由梨さんも、サンタはいないって知ってるでしょ？」

浩之の質問を受け、由梨は笑う。

「浩之君はサンタさん、信じてないのかな？」

「由梨さんだって信じてないんでしょ？」

浩之の言葉に由梨はまた笑う。

「私は信じてるよ」

「そんなの嘘だよ」

「ホントよ。だって、この世界には魔法使いがいるんだから」

「え？」

「だから、サンタさんもきつといるって私は信じてる」

由梨は嬉しそうに言った。

「そんなの嘘だよ」

「ホントの事よ」

「由梨、手が足りないの！ 手伝って！」

「あ、はい！」

大きな声で呼ばれ、由梨は慌てた様子で声がした方へ向かう。

「サンタなんていないんだ」

1人になった浩之は小さな声でつぶやいた。

「浩之、一緒に準備しようぜ」

その時、そんな言葉をかけられ、浩之は笑顔を見せる。

「うん、わかった」

そして、みんなの輪の中に入り、一緒にパーティーの準備を始めた。

クリスマスイブ。

それは、サンタクロスにとって最も忙しい日だ。

「カイト、早くしないと間に合わないよ！」

リナは慣れた手付きでプレゼントを包む。

それに比べ、カイトは何度もやり直しているため、ほとんど進んでいない。

「もう、すっかりしなさいよ」

「俺はこういうの苦手なんだよ。出発まで、あとどれぐらいかな？」

「まあ、私の分が終わったら手伝ってあげるよ」

「ホント!? 助かるよ!」

カイトは嬉しそうに笑う。

「だからって、手を抜いたら承知しないからね!」

「ああ、わかってるよ……」

凶星だったのか、カイトは困ったように返事をした。

「リナ、相変わらず飲み込みが早いね」

その時、自分の分をほとんど終えてしまったらしいレイアがリナとカイトの様子を見にやってきた。

「先輩に比べたらまだまだですよ」

「ホント、リナみたいな優秀な後輩を持って私は幸せだよ」

そう言いながら、レイアはカイトに目をやる。

「それに比べて、カイトはしょうがないね」

「リナの方が1年多く経験があるから……」

「去年のリナの方が十分役に立ってたよ」

レイアに冷たく言われ、カイトは何も言い返さなかった。

「ほら、教えてあげるから、すっかり覚えな。カイトは去年もやってない分、遅れてるんだから」

「あ、はい」

「私も終わったら手伝いますよ」

「いや、リナはゆっくりしてて良いよ。あんまりカイトを甘やかせちゃいけないしね」

「そんなー」

「このままじゃ、いつまで経っても上達しないよ。少しは苦しみな……」

「……はい、わかりました」

落ち込んだ様子のカイトを見て、リナは笑う。

そんな中、リナは最後のプレゼントを包み終えた。

「先輩、終わりましたけど?」

「リナ、手伝ってくれよ」

「ダメだよ。時間はたくさんあるんだ。リナはゆっくりしてなよ」

「はい、わかりました」

「そんなー」

「じゃあ、頑張つてね」

リナは困った様子のカイトを残し、その場を後にする。

「ゆっくりしてろって言われても、何もする事ないよ……」

周りのサンタクロースを手伝う事も出来るが、それではカイトを手伝う事と何ら変わらないため、リナはどうしようか考えてしまった。

「そうだ……」

そして、リナはある事を思い付き、笑った。

サンタクロースも人と同じように学校に通い、卒業して初めて1人前のサンタクロースとしてプレゼントを配る事が出来る。

そして、リナは学校にいる時、周りから優等生と呼ばれていた。

飲み込みは早く、性格も素直で、何の問題も起こさなかったリナ。そして、サンタクロースとしてプレゼントを配るようになってからも、リナは優秀だった。

何十年と経験を積んだベテランのサンタクロースもいる中、3年目のリナはまだ新米サンタクロースだ。

それでも、リナは周りから信頼されている。

しかし、リナがこの時、思い付いた事はそんな信頼を裏切るものでもあった。

「時間はあるしね」

リナは特に考えもせず、その思い付きに従う事にした。

そして、誰にも見つからないようにトナカイとソリを出すと、静かに移動を始めた。

「由梨、ちよつと良いかな？」

由梨と一緒にボランティアをしている、梓^{アスサ}は子供達に聞こえないように、由梨に相談を頼んだ。

「何？」

「浩之君の事なんだけど……」
梓はそこで言葉を詰まらせる。

「どうしたの？」

「みんな……プレゼント何が欲しいか聞いたじゃない？」

「うん」

「寄付してもらったお金で、さっきプレゼントも買ったんだけど…」

…

「どうしたの？」

「浩之君だけ、何が欲しいか書いてなかったの」

それは、サンタクロスにお願いするためと言って、子供達に書かせたものだ。

プレゼントとして、ラジコンを頼む子もいれば、ぬいぐるみを頼む子もいた。

しかし、浩之だけはその紙を白紙で出していた。

「どうしようか？」

「……私に任せて」

先程、浩之とクリスマスについて話をした由梨は、何とか浩之の心を開こうと手を打つ事にした。

「浩之君、ちよつと良いかな？」

由梨と呼ばれ、浩之は素直にやってくる。

「この前、サンタさんにプレゼントお願いしようって、この紙渡したでしょ？」

由梨は白紙の紙を見せる。

「浩之君、何も書いてないから、何が欲しいのかわかって思っ」

「僕、欲しいものないよ」

「え？」

意外な言葉を言われ、由梨は困ってしまった。

「サンタさん、何でも持ってきてくれるよ？」

「サンタなんていないもん」

「でも、浩之君欲しいものあるでしょ？ ラジコンとかプラモデルとか……」

「そんなのいらない」

浩之はそう言うと、みんなのところへ戻ってしまった。

「珍しいね」

浩之と由梨の様子を見ていたのか、梓は物陰から出てくると、困ったように溜め息を吐く。

「浩之君、いつもは素直なのにね」

「うん……」

由梨も困ったように溜め息を吐いた。

「でも、浩之君って自分から何かをする事ないよね」

「そうだね」

浩之はどこか引込み思案な部分がある。

頼まれれば、すぐ言う通りにするが、自分の考えで何かをしようとした事はないのだ。

その事が由梨と梓は心配だった。

「まあ、少しずつ話すよ」

由梨はどうしようか考えながら、そうつぶやいた。

「1年ぶりだな」

リナは華やかな街を見て、笑顔になる。

今日は人が住む世界とサンタクロースが住む世界を結ぶ道を自由に行き来できる日だ。

しかし、特別な用事がなければ、サンタクロースは人が住む世界に行っってはいけない。

それは、去年のような問題が発生する危険があるからだ。

この事は学校でも教わったため、リナも当然、知っている。知っていないが、リナは人間界にやってきたのだ。

当然、サンタクロースの格好をしているリナを通り過ぎる人達は見ているが、クリスマスイブのため、それほど気にしている人はいな

いようだ。

「お兄ちゃん、待ってよ！」

「寒いから、さっさとケーキ買って、家に帰るよ」

「色んなお店行こうよ！」

「良いけど、暖房が効いてない店はダメだからね」

そんな声が聞こえ、リナは笑顔を見せる。

「とにかく、早く行くよ」

「もう、待ってよ！」

そこにいた兄妹はリナに気付く事なく、行ってしまった。

そんな2人を見送ると、リナは2人が行った方向とは別の方向に歩き出す。

リナは特に行きたい場所があるわけではなく、普段行く事の出来ないこの世界の事を少しでも多く知りたいと思っている。

そのため、特に目的もなく、歩き回る事にした。

リナが約束を破ってこんな行動をしているのは普段、真面目でいたからでもある。

まだ若いリナはカイトのように自由でいたいと思う時もある。

しかし、リナはそういった事を我慢していた。

そして、特別な日である今日だけは我慢しなくても良いのではとリナは考えてしまったのである。

「サンタさんだー」

時々、自分を指差す子供に対して、リナは手を振った。

その時、リナはある建物の前で止まった。

庭を挟んで、子供達がパーティーの準備をしている姿が見えたからだ。

その子供達の姿に、リナは自分が幼かった頃の姿を重ねていた。

「サンタさん？」

いつの間にか近くに来ていた少女に話しかけられ、リナは少しだけ驚いてしまった。

「そうよ。私はサンタクローズだよ」

「サンタさんはおじいさんじゃないの？」

「サンタクロースってたくさんいるんだよ。その中には私みたいに若いサンタクロースだっているんだから」

気分が良かった事もあり、子供になら大丈夫だろうと、リナは自分の事を話した。

「そうなんだ」

「みんな、パーティーの準備してるの？」

「うん、そうだよ」

リナは少しだけ考えた後、笑顔を見せた。

「私もお手伝いして良いかな？」

「うん、良いよ！」

その子は嬉しそうに言った。

「それじゃあ、みんなのところに行こうか」

リナはその子の手を握ると、他の子供達の下へ向かった。

カイトはレイアに叱られながら、プレゼントを包んでいる。

「ほら、そこも違っよ」

「あ、はい」

なかなか手順を覚えられないカイトを見て、レイアは溜め息を吐く。

「全く、リナを見習いな」

「でも、プレゼントを配るのは俺の方が早かったですよ」

「そんな事言ってないで、ちゃんと覚えなさいよ」

また、レイアに怒られ、カイトは困ったような表情になった。

「カイトとリナって、ずっと前から一緒なんだよね？」

レイアはふと、そんな事を尋ねた。

「はい、そうですよ」

「リナって前からあんな感じだったの？」

「え？」

「すごい真面目で、しっかりしてて、カイトとは大違いだから」

「そんな、ひどい事言わないで下さいよ」

カイトが泣きそうな声で言ったため、レイアは笑う。

「たまには息抜きをさせてあげな。リナは真面目過ぎるよ」

カイトはこの時、レイアがリナに手伝いをさせなかった理由に気付いた。

「いつまでもリナに頼っちゃダメだよ。カイトだって、学校を卒業した1人前のサンタクロースなんだから」

「はい、わかりました」

レイアの言葉を聞きながら、カイトは作業を進める。

そんなカイトは少しだけ真面目にも見えた。

「そういえば、カイトは留年したんだよね？」

「ちゃんとやりますから、黙ってて下さいよ！」

カイトに怒られ、レイアは笑った。

「みんな、サンタさんが一緒にお手伝いしてくれるそうよ」
許可も得られ、リナは子供達の手伝いをする事になった。

「あまり時間がないので、少ししか手伝えないんですけど……」

「うっん、それでも助かるよ。ホントにありがとうね」

由梨に礼を言われ、リナは照れくさそうに笑う。

「どうして、サンタさんがここにいるの？」

「プレゼントは？」

「夜まで時間があつたから、遊びに来たの。プレゼントは明日の朝までの楽しみにしててね」

「ホント!？」

「やったー!」

子供達は嬉しそうに騒ぎ出す。

「そんなの嘘だよ」

そんな中、1人だけ様子が違う子供がいた。

それは、浩之だ。

「浩之君、どうしてそんな事言うの？」

「こんなに若いサンタなんているわけない」

「サンタさんはたくさんいるんだよ」

リナから話を聞いた少女がそう言ったが、浩之は納得していないようだ。

「だからって、こんなに若いわけない」

「サンタクロースの中には私みたいに若いサンタクロースも多いのよ」

「そんなの嘘だ!」

浩之はそう言うと、どこかへ行ってしまった。

「浩之君、待って」

梓はそんな浩之の後を追っていく。

「ごめんなさいね」

「いえ、別に気にしてませんから」

リナは笑顔を見せる。

「ちよつと良いかな？」

そう言われ、リナは子供達を残して由梨と2人で話をする事にした。

「あの子……浩之君って言うんだけど、クリスマスが嫌いって言うの」

「そうなんですか？」

「プレゼントを頼んでも何もいらないうって言って、何が欲しいのかもわからなくて……」

由梨はリナの手を握る。

「あなたなら、浩之君の欲しいものが何なのかわかるよね？」

「え？」

「浩之君にプレゼントしてもらえないかな？」

リナは由梨の真剣な目を見て、困ってしまった。

「どうして私に？」

「あなた、サンタクロースでしょ？」

「それは……」

「本当のサンタクロースでしょ？」

由梨の質問にリナは固まってしまった。

「私にはわかるよ。あなたの話も私は信じる」

由梨はそう言うと、リナの肩に手を置く。

「お願い、浩之君に素敵なクリスマスプレゼントを渡してあげて」

リナは由梨の真剣な目を見て、うなずいた。

「はい、わかりました」

「ありがとう」

由梨はそう言うと、リナの肩を軽く叩いた。

そして、リナと由梨は浩之と梓がいる場所に向かう。

「梓？」

「ん？」

「あのさ、リナちゃんと浩之君、2人だけで話をさせたいんだけど……」
由梨は簡単に話をして、梓から許可を得た。

「それじゃあ、リナちゃんお願い」

「はい」

リナの返事を聞き、由梨は安心したように梓を連れてその場を後にした。

「浩之君だよな？」

リナは声をかけながら、浩之のそばに座る。

「何か、欲しいものないの？」

優しい言葉をかけたが、浩之は反応を見せない。

その時、リナはある事に気付くと、少しだけ溜め息を吐いてしまった。

それは、浩之の欲しいものがわからないからだ。

サンタクロースなら誰もが持っているバッジ。

そのバッジにより、サンタクロースは様々な事が出来る。

浩之の欲しいものが何なのか、知るといふ事も本来なら容易い事だ。

しかし、今回はそう簡単にいく話ではないようだ。

「願い事とかでも良いんだよ。何かないかな？」

「何も無い。プレゼントなんていらぬ」

「でも……」

「それにサンタなんていないんだ！」

浩之はリナの話の話を聞こうとしない。

「何で、そう思うの？」

「だって……」

その時、浩之が考えている事はリナにもわかった。

「子供達から何かもらえるわけでもないのに、プレゼントを配って

回るなんて、おかしいもんね」

「え？」

浩之は自分が言おうとした事をリナに言われたからか、驚いた様子

を見せる。

「でも、浩之君にだって願い事はあるでしょ？」

「叶いもしない願い事なんて持たない」

浩之の言葉にリナは少しだけ困ってしまった。

「叶うかどうかなんてわからないじゃない。初めから無理って決め付けたらダメだよ」

「無理なものは無理だもん」

そんな浩之を見て、リナは少しだけ笑う。

「そうだ……」

リナはある事を思い付いたが、提案しようかどうしようか迷ってしまった。

「何？」

「うん、どうしようかな……」

リナはなかなか結論を出す事が出来ないで、しばらく黙り込んでしまった。

「そうだな……。とりあえず、みんなのところに帰ろうか」

リナはそう言うと、浩之の手を引いて、みんなの下に戻り、パーティーの準備を手伝った。

「やっと終わったー！」

カイトはプレゼントを全て包み終わると、大きな声をあげた。

「来年は1人でやるんだよ」

「はい、わかりました」

カイトはそう言いながら、後片付けを始める。

「でも、カイトも真剣にやれば……」

「何ですか？」

「いや、何でもないよ」

レイアは意外に飲み込みが早いカイトの事を褒めようとしたがやめた。

カイトは褒めて伸びるタイプではないと知っているからだ。

「時間もそれなりに残ってるしね」

レイアはそう言いながら、ふとリナの事を思い出した。

「リナはどうしてるのかな？」

「そんなの知るわけじゃないじゃないですか」

「まだ戻ってないなんて、珍しい事もあるね」

そこで、レイアの頭の中に小さな不安が生まれる。

「もしかして、人間界に行っていたりして……」

「え？」

そして、カイトも同じ考えを口にしたため、レイアは驚いてしまった。

しかし、すぐに気持ちを切り替え、笑顔を見せた。

「カイトじゃないんだからないよ。まあ、そのうち帰ってくるよ」

「俺とリナの扱い、随分と違いますか？」

「カイトとリナは違うんだから当たり前」

レイアはそう言ったが、当然カイトは納得していない様子だ。

「俺、ちょっとだけリナを捜しに行ってきますね」

「良いよ、心配ないから」

「どこかで寝てるかもしれないじゃないですか」

「そんなのないない」

「もう良いです」

カイトは怒った様子で行ってしまった。

そんなカイトを見送った後、レイアもリナを探すため、その場を後にした。

「みんな、パーティーの準備ありがとう」

ここで子供達と一緒に生活している職員、礼美レイミが戻り、子供達は嬉しそうに騒いだ。

「由梨ちゃんと梓ちゃんもありがとう」

普段、由梨と梓は学校もあるため、正式にここで働いているというわけではない。

しかし、頻繁に訪れては手伝いをしているため、子供達や、礼美とはすっかり顔馴染みになっている。

「あれ、サントさん？」

「あ、時間があったので、遊びに来たんです」

「そう、ありがとう」

リナは、この礼美という女性がこの責任者であると判断すると、ある事を提案する事にした。

「あの、すみません、少し良いでしょうか？」

そう言くと、リナは礼美と2人で奥に行った。

「あの、お願いがあるんですけど……」

「何？」

「浩之君をここから連れ出しちゃいけないでしょうか？」

リナの言葉に礼美は何か考えているような様子を見せる。

「どこか連れて行きたい場所があるの？」

「その……」

リナはと言えば良いかわからず、言葉を詰まらせる。

「礼美さん、私からもお願いします」

その時、2人を追ってきたのか、由梨が出てくると頭を下げた。

「リナちゃんに、浩之君を任せてみたいんです」

「お願いします」

リナも由梨に合わせ、頭を下げた。

それから少し経ち、礼美は笑った。

「うん、任せるよ」

「え？」

思った以上にすんなりといってしまい、リナは驚いた。

「浩之君、ここには最近来たばかりなんだけど、私も心配してたの。少しずつ、みんなの輪の中に入れてもらえればと思っただけど……」

礼美はそこで、由梨の方へ目をやった。

「どんな考えがあるのかわからないけど、由梨ちゃんがそう言うなら、大丈夫ね。リナちゃんって言うのかな？ よろしくね」

「ありがとうございます」

リナは礼を言った後、浩之の下に戻った。

「浩之君、出掛ける準備をして」

「え、どこに行くの？」

浩之は突然の事に驚いた様子を見せる。

「サンタクロースが、どうしてプレゼントを配るか、知りたくない？」

リナの質問に浩之は答えない。

「ねえ、どう？」

「知りたいけど……」

「よし、決まり！」

リナは浩之の手を握る。

「私と一緒に、みんなへプレゼントを配ろうよ」

「え？」

「今日1日だけ、浩之君もサンタクロースになるの」

リナの話信じていない浩之は答えに困ってしまった。

「そんなの無理だよ」

「大丈夫よ。私も一緒なんだから」

「それに、どうして僕なの？」

その質問にリナは答えない。

「私達サンタクロースもね」

代わりに別の事を話し始める。

「クリスマスプレゼントをもらっているの」

リナは笑顔を見せる。

「それが、浩之君へのクリスマスプレゼントになると思うから」

浩之はリナの考えがわからなかった。

「でも、僕なんか無理だよ」

「大丈夫よ。ほら、行きましょ」

リナは浩之に手を差し出す。

浩之はしばらく考えた後、リナの手を握った。

「リナ、どこに行ったんだよ？」
なかなかリナが見つからず、カイトは少しだけ戸惑っていた。
レイアの言う通り、リナはしっかりしているため、カイトが心配を
する必要はないはずだ。
しかし、カイトはリナの事が心配だった。
カイトだけはリナの弱さを知っているからだ。

それは、2年前のクリスマスイブ。

リナが初めて1人前のサンタクロースとしてプレゼントを配る事になつた日の事だ。

「カイト！」

家でゴロゴロしていたカイトはレイアの声を聞き、飛び起きた。
そして、慌てて玄関に向かった。

「先輩、何ですか？ 俺はまだプレゼント配れないんですよ？」

「リナ、どこに行ったか知らない？」

「いないんですか？」

「もう、どこ行ったの!？」

レイアは慌ててどこかへ行ってしまった。

「リナ、大丈夫かな……」

カイトは少しだけ悩んだ後、リナを捜しに出掛けた。

「どうせ、あの場所なんだろうけど……」

カイトはリナがどこに行ったのか、心当たりがあった。

そこは、カイトとリナしか知らない秘密の隠れ場所だ。

リナは悩んだり、落ち込んだりした時、いつもそこにいた。

「あ、いたいた」

カイトがその場所に行くと、予想通りリナがいた。

「リナ、何やってるんだよ？ 先輩が捜してるよ」

カイトはそう言いながら、リナに近づいた。

「……怖いの」

「え？」

リナの意外な言葉にカイトは驚いてしまった。

「何言ってるんだよ？ 俺と違って優等生なのに……」

「優等生なんかじゃないよ。覚え切れない事ばかりだし……」

リナは泣き出してしまった。

優等生と呼ばれていたが、リナはどちらかといえば、物覚えは良くない方らしい。

飲み込みが早いと言われているのは、誰よりも努力しているからこそだ。

「リナが自信ないなんて言ったら、来年から配る予定の俺はどうすれば良いんだよ？」

「カイトはサボってばかりいるからじゃない。私なんかよりカイトの方が才能あるよ」

いつもカイトを怒ってばかりいるリナだが、時々こついった弱さを見せる。

「リナ、どうしてサンタクロースになりたいって思った？」

「え？」

「プレゼントを配るだけで、俺達はもらえないんだよ？」

「……カイトだってサンタクロースになろうとしてるじゃない」

リナの言葉にカイトは笑顔を見せる。

「俺は誰かのために何かしたいから。だから、サンタクロースになりたいんだよ」

カイトの言葉を聞き、リナは溜め息を吐く。

「やっぱり違うな」

「え？」

「私、カイトみたいに理由なんて持ってないよ」

リナは寂しそうに言った。

「親とか先輩に言われたからだなんて、理由にならないよね」

「でも……」

「私、やっぱりサンタクロースなんて向いてないね。私には出来な

いよ」

「何だよそれ！？ 俺みたいに……いや、俺はサボったせいだけど、サンタクロースになりたくてもなれない奴だっているんだよ！」

カイトの言葉にリナは何も言い返さなかった。

「リナ、学校に行く前も自信ないって言ってたけど、どうしてやる前にそんな事言うんだよ？」

「だって……」

「やってみたら、色んな発見とかあるかもしれないだろ？ もしかしたら、サンタクロースとしてプレゼントを配る理由になるものだって見つかるかもしれないだし」

リナが何か考えている様子だったため、カイトは少しずつ声を小さくしていった。

「とにかく、やる前から出来ないなんて言うなよ」

「そうだね……」

まだ不安はあるようだったが、リナの変化があったため、カイトは安心した。

「ほら、早く行けよ」

「遅れた理由、何て言えば良いかな？」

「優等生なんだから、自分で考えろよ」

「うん、わかった」

リナは笑顔でその場を後にした。

そんなリナの後姿をカイトは優しく見送った。

カイトはリナとの秘密の隠れ場所に来ていた。

「たく、どこに行ったんだよ？」

しかし、ここにもリナがいなかったため、カイトは何かあったのではないかと心配になった。

「カイト？」

その時、トナカイが引くソリに乗って、リナがやってきた。

「リナ、何やってたんだよ？」

「あ、ごめん。ちょっとね。カイトはどうしてここにいるの?」

カイトがいた事で、リナは戸惑っているようだった。

「たく、どこに行ってたんだよ?」

「あ、えっと……」

リナは困った様子で言葉を濁す。

その時、ソリの操作に集中していなかったからか、ソリが勢いよく地面に下りた。

「痛っ!」

同時にそんな少年の声が聞こえ、カイトは驚く。

「今のは!？」

「え、何が?」

ソリの中にはプレゼントを入れる袋が入っている。

その袋に何かが入っているのか、モゾモゾと動いたのを見て、カイトはさらに驚いた。

「その袋、誰が入ってるのか!？」

「何言ってるのよ?」

カイトはリナを無視して、無理やり袋を開ける。

そこには、1人の少年がいた。

「あのさ、浩之君っていつて……」

「人を連れてきちゃダメだよ!」

「お願い! みんなには黙ってて!」

リナに頼まれ、カイトは困ってしまった。

「何で連れてきたの?」

「プレゼント配るの、手伝ってもらおうと思って……」

「は?」

「浩之君のためなの! お願い!」

「そんな事言われても……」

カイトはしばらく考えた後、溜め息を吐く。

「僕、やっぱり無理だよ。帰る」

「何言ってるの? ここまで来たんだよ?」

「だって、無理なんだもん」

浩之は自信なさ気に言った。

その時、カイトは何となくリナが浩之を連れてきた理由に気付いた。

「その子を一緒に乗せる分、ソリはいつもよりも遅くなるんだよ？」

「うん、そうだね」

「それでプレゼントを配れなかったら、たくさんの子が悲しむんだよ？」

「わかってる」

リナはずっと下を向いていた。

「だからリナが配るプレゼント、半分俺が運ぶよ」

「え？」

「あと、その格好はやめよう」

カイトは浩之の格好をサンタクロースと同じものにした。

「浩之君はここで待ってもらって、出発する直前に乗せるようにした方がいよいよ。袋に入れておくなんて、すぐ見つかったちゃうし」

「カイト……？」

「ほら、早く準備するよ。プレゼント、移さないといけないんだから」

「ありがとう」

リナから礼を言われたが、カイトは特に何も返さなかった。

「浩之君、ちょっと行ってくるから隠れててね」

「うん」

「ほら行くよ」

カイトは浩之を置いて、リナと共にその場を後にした。

浩之は本当にサンタクロースがいるという事に驚いていた。

リナからは隠れているように言われたが、周りにあるものが全て新鮮で、思わず外に出て辺りを見回していた。

「おやおや」

その時、後ろから声が聞こえ、浩之は振り返る。

「リナも困ったものじゃ」

その人物は浩之が想像していたサンタクコースと同じ、ひげを生やしたおじいさんのサンタクコースだった。

そこで、人から見つかってはいけないと思っていた浩之は慌てて逃げようとした。

「怒りはしないから、待ちなさい」

しかし、そんな優しい声をかけられ、浩之は立ち止まる。

「サンタクコースはプレゼントを配る事が目的じゃないんじゃ」

「え？」

「本当の目的は幸せを配る事なんじゃ。それを忘れるでないぞ」

それだけ言うと、そのサンタクコースはその場を後にした。

その後姿を浩之は複雑な気持ちで見っていた。

「カイト、大丈夫？こんなに重いものを運んだ事ないでしょ？」

リナの分を足すと、カイトが運ばなければならぬプレゼントの量はとても多くなってしまった。

「大丈夫、軽いのを中心に足しただけだし、俺はリナよりも配るのは早いんだから」

「ごめんね」

「リナらしいよね」

カイトは笑顔を見せる。

「ホント、子供好きなんだから」

「ごめんなさい」

「それにあの子……」

「カイト！ リナ！」

レイアの声が聞こえ、2人は振り返る。

「リナ、戻ってたんだね」

「あ、はい」

「もうすぐ出発だよ。2人ともしっかりやりな」

レイアはそれだけ言うと、その場を後にした。

「そろそろ浩之君を乗せてもいいかな？」

「そうだね。でも、袋に入れておくなりして、見つからないようにしなよ」

「うん、わかった。それじゃあ、行くね。多分、出発までに会う時間はないね」

「気を付けるよ」

「カイトもね」

リナはそう言うと、ソリを飛ばして行ってしまった。

「大丈夫かな？」

カイトは試しに少しだけ飛んでみたが、バランスが取れず、すぐに

ソリを下ろしてしまった。

「どうしよう……」

リナのために無理をしようとしたが、まだ未熟なカイトには不可能な事だった。

「まあ、何とかしよう。プレゼントをいくつか置いて行って、戻ってければ……」

「カイト」

「え？」

ソリに乗ってやってきたレイアを見て、カイトはリナがいなくなつた理由をどう説明しようか考えた。

そして、適当な言い訳を思いついた。

「リナは、忘れ物したとかで……」

「もう良いよ。全部知ってる」

「え？」

意外な事を言われ、カイトは驚く。

「リナの分、私も運ぶよ」

「でも……」

「早くしないと間に合わないよ。さっさと渡しなつて」

レイアの言葉に甘え、カイトはある程度バランスが取れるぐらいまでプレゼントを減らす。

「すみません」

「カイトは謝らなくて良いの。リナのためにえらい事してるんだから」

レイアの言葉にカイトは笑顔を見せる。

「あ、私が手伝つたって事、リナには言わないで」

「何ですか？」

「私は厳しい先輩でいたいんだよ」

「え？」

カイトは思わず笑ってしまった。

「わかつた？」

「はい、わかりました」

「それじゃあ、すぐ出発だからね。頑張りなさいよ」

「はい、大丈夫です」

レイアを安心させようと、カイトはしっかりと返事をした。

「浩之君」

リナが来ると、浩之は安心したように笑った。

「大丈夫だった？」

「さつき、おじいさんが来たけど、大丈夫だったよ」

「おじいさん？」

おじいさんという言葉から連想出来る人物と言えば、長だ。

そのため、リナは少しだけ不安になってしまった。

「あと……ごめんなさい」

「え？」

しかし、浩之から意外な言葉を言われ、リナは考えを中断させる。

「何の事？」

「サンタなんて、いないって……お姉ちゃんにも嘘つきだなんて言
つちゃって……」

「そんな事は良いの。それより、一緒にプレゼントを配るの頑張ろ
うね」

「うん」

浩之の笑顔を見て、リナは浩之を連れてきて良かったと感じていた。
今、この瞬間さえも浩之にとって大切な思い出になると感じている
からだ。

しかし、浩之を連れてきた理由はそれだけではない。

サンタクロースとしてプレゼントを配る事により、ある事を知って
ほしいと思っているのだ。

その時、大きなベルのような音が響き渡る。

「出発の時間だよ」

リナは浩之の手を握ると、ソリに乗せた。

「行こうか」

「うん」

リナはソリを宙に浮かばせる。

「僕、隠れてなくて良いの？」

「景色を見たいでしょ？ 誰かに見つかったら見つかったで、何とかするから」

少しだけカイトのような適当な考えを持ち始めている事に気づき、リナは少しだけ嬉しそうに笑った。

サンタクロースは眠ってしまった子から順番にプレゼントを配って回る。

つまり、早く眠った子からプレゼントをもらえるのだ。

代わりに遅くまで起きているところか、眠らない子のところにサンタクロースが来る事はない。

「まずは、あそこの家だよ」

リナは家を指差す。

「どうやって中に入るの？」

浩之はずっと思っていた疑問を口にした。

「煙突から入るんでしょ？」

「それは昔の話よ。昔は煙突がある家が多かったし、煙突から入るのが一番簡単だったから煙突から入ってただけ」

リナは目的の部屋の窓の横にソリを待機させる。

「それじゃあ、私が見本を見せるからね」

リナは袋からプレゼントを取り出すと、窓をすり抜けて部屋の中に入った。

そして、子供の寝顔を少しだけ見た後、枕元にプレゼントを置いて戻った。

浩之は驚いた様子でリナを待っていた。

「すごいー！」

「私が手伝うから、次は浩之君も一緒にやろうね」

「うん！」

浩之の元気な返事を聞き、リナは笑った。

「サンタクロースになった理由……」

リナは話そうか少しだけ迷ったが、話す事にした。

「私、親とか先輩とか色んな人に言われて、しょうがなくなっただけでサンタクロースになったの」

真剣に話を聞く浩之の目を見ながら、リナは話を続ける。

「本当は自信とか全然ないし、サンタクロースになりたくなかったんだよね」

リナは寂しそうに笑う。

「でも、さっきいたカイトに励まされて、サンタクロースとしてプレゼントを配って、大切な事に気付いたの」

「何なの？」

「それは、最後に教えてあげる」

「教えてよ」

「ダメ」

リナは笑顔を見せる。

この時、リナは初めてプレゼントを配った時の事を思い出していた。

カイトに励まされ、出発したあの日。

「えっと、どこ？」

リナは道に迷いながら、最初の目的地を目指していた。

「あ、あれだ！」

リナは目的の家を見つけると、すぐ近くにソリを待機させた。

「これが初めての仕事……」

深呼吸をした後、リナは窓をすり抜け、部屋に入った。

しかし、そこでプレゼントを持ってきていない事に気付いた。

「あ、プレゼント……」

リナは慌ててソリに戻ると、プレゼントを探す。

その時、風が吹き、ソリが家の壁にぶつかってしまった。

「大変！」

リナは慌てて、その場を離れた。

しばらくした後、中にいた少年が窓を開けて外の確認を始めた。

「どうしよう……」

リナはこういった場合、どうすればいいか、学校で習った事を思い出した。

「そうだ。別の場所に行つて、後で来ればいいんだ」

その事を思い出したリナはすぐに次の目的地を目指した。

「でも、初めての仕事……失敗しちゃったな」

その事がリナの中で納得出来なかった。

そして、リナはソリを止めた。

「やっぱり、最初はこのプレゼントを渡すところから始めたい」

リナはそう言うと、すぐに引き返した。

近くまで来て、さっきの少年がすぐに寝始めた事を確認すると、リナはまた深呼吸をした。

本来、子供の眠りが浅いと思われる時にプレゼントを置きに行つてはいけない。

その子供が起きてしまう可能性があるからだ。

しかし、リナはどうしても、その少年にプレゼントを配るところから始めたかった。

それは、リナのプライドだったのかもしれない。

「よし」

リナはしっかりとプレゼントを持つと、また部屋の中に入った。

そして、そつと少年の枕元にプレゼントを置いた。

その時、少年が寝返りを打ったため、リナは慌てて部屋を出て行った。

「危なかった……」

リナは深呼吸をして、気持ちを落ち着けながら次の目的地を目指した。

「やっぱり、私なんかじゃうまくいかないよね」

カイトの言葉を思い出しながら、リナはこれからどうしようか考えていた。
それは、このままサンタクロースとして毎年プレゼントを配るかどうかだ。
しかし、その答えを見つめる前にリナには今夜のうちにプレゼントを配り終えるという仕事があった。
そのため、結局この時に答えを出す事は出来なかった。

そんな事を考えている間に、リナと浩之は次の目的地に着いた。

「それじゃあ、一緒に行こうか」

「でも……」

「どうしたの？」

「僕は窓にぶつかっちゃうよ」

浩之の言葉を聞き、リナは笑う。

「今日だけは浩之君もサンタクロースなんだよ。ほら、プレゼント持って」

浩之は袋からプレゼントを探す。

「ほら、これ」

リナは袋の中にあつた1つのプレゼントを指差す。

浩之はすぐにそれを手に取った。

「それじゃあ、行くよ」

リナは浩之の手を握ると、先に窓をすり抜けて部屋に入る。

そんなリナに続いて、浩之も窓をすり抜けた。

「静かにね」

驚いた様子の浩之に、リナは小声でそう言うと、ベッドで寝ている少女の枕元を指差した。

「そこに置くの」

「うん」

浩之はそっと近づくと、プレゼントを静かに置いた。

「出るまで油断しないでね」

リナの言葉に浩之はうなずき、静かにしたまま一緒にソリへ戻った。
「初めてでこんなに出来るなんて、すごいよ！」

リナは嬉しくなり、笑顔でそう言った。

「その調子で、全部配っちゃうよ」

「うん」

いつの間にか、浩之も笑顔になっていた。

「緊張した？」

「うん。でも、楽しい」

「浩之君はカイトと一緒にサンタクロースに向いてるかもね」

「え？」

リナの言葉に浩之は驚いてしまった。

「私は、いつまで経っても緊張しちゃうんだ。楽しいって思えないの」

リナはまた自分の事を話し始める。

「浩之君の言うとおり、私は何の理由もなく、こんな事出来ないよ」

「その理由って何なの？」

「それも、最後に教えてあげる」

浩之は少しだけ不機嫌な表情になった。

「ほら、プレゼントはたくさんあるんだから、ドンドン配らないとそんな風に話をはぐらかしたりリナを見て、浩之はまた不機嫌な表情を見せた。

偶然、近くの目的地を目指す事になり、カイトとレイアは並んで移動している。

「リナ、大丈夫かな？」

「心配ないよ。カイトじゃないんだから」

「だから、俺と比べないで下さいよ」

「ごめんごめん」

レイアはいちおう謝ったが、悪いとは思っていなかった。

「でも、カイトはリナに優しいね」

「いつも助けてもらってますし」

「それだけ？」

「まあ、幼なじみなので」

「それだけ？」

そこまで言ったところで、カイトはレイアの言いたい事を察した様子を見せる。

「それだけですよ」

「ホントかなー？」

「俺、その家なので行きますね」

カイトは逃げるようにレイアと距離を取った。

そんなカイトを見て、レイアは笑った。

「青春してるね」

そう言った後、レイアは頭を掻いた。

「何か、親父くさいな」

レイアは少しだけ溜め息を吐いたが、すぐに気を取り直した。

「さてと、仕事仕事」

目的の家を見つけたが、レイアは特にスピードを落とす事なく近づく。

そして、窓の近くにソリを急停止させると、袋からプレゼントを取り出し、すぐ部屋に入った。

それから数秒後にはソリに戻り、また次の目的地を目指した。

「時間があるから、またカイトと一緒に行くか」

次の目的地もカイトと近くである事を知っているため、レイアは辺りで待機する事にした。

すると、すぐにカイトがやってきた。

「配るのは早いんだね」

「何で、いるんですか？」

「後輩の事を思って、待っててあげたんだよ。優しい先輩じゃないか」

「また、からかうだけじゃないですか」

この時、レイアはカイトをいかにからかうかだけを考えていた。

リナは移動中に何度も時計を見た。

「間に合う?」

「ギリギリかもね。カイトに半分頼んで良かった」

リナと浩之は順調にプレゼントを配っているが、それでもリナが1人でやった方が断然早かった。

「僕のせいだよな?」

「浩之君はそんな事気にしないの。それに絶対間に合うから、心配しないで」

そう言いながらも、リナは少しだけ焦っていた。

他のサンタクローズと会わないように移動している事も重なり、少しずつ遅れが大きくなっていくからだ。

そんな気持ちから、リナはいつもよりもスピードを出していた。

「次のプレゼント取ってくれない?」

「あ、はい」

浩之は袋からプレゼントを出し、リナに渡した。

その時、リナは焦りからか、手を滑らせてプレゼントを落としてしまった。

「大変! 捕まって!」

リナはプレゼントが地面に落下する前にキャッチしようとソリを急降下させる。

しかし、急降下させながらでは手が離せないため、リナは先回りする事にした。

ソリはプレゼントよりも速い速度で地面から数メートル上まで移動すると、停止した。

「プレゼントは?」

プレゼントの落下点とソリの位置は微妙にずれていた。

何もしなければ、プレゼントはソリのわずか横を通り過ぎ、地面に落ちてしまっていただろう。

「届いて！」

リナは手を伸ばし、何とかプレゼントをキャッチした。しかし、リナはそのままソリから落ちてしまい、地面に叩きつけられてしまった。

「大丈夫!？」

浩之の心配する声に応えるようにリナは笑顔を見せる。

「うん……大丈夫。プレゼントは無事だよ」

とっさに自分の体をクッションにしたため、プレゼントは無事だった。

「お姉ちゃんは大丈夫!？」

「心配してくれてありがとう」

リナはソリを下ろすと、すぐに乗った。

「痛い……」

右から落ちたためか、リナの右腕と右足は言う事をきかない状態になっていた。

「参ったな……」

この状態では、とても残りのプレゼントを配れそうにない。

そんな考えがリナの頭に浮かび、混乱してしまった。

「僕がちゃんと渡さなかつたから……」

「私が焦っちゃったせいだよ。浩之君は何も悪くないから、気にしないで」

リナはどうしようか考えながらも、とりあえず移動する事にした。バツジのおかげでケガは軽減されていたが、それでも大きなケガに変わりはない。

そんな事を考えている間にも移動を続け、2人は目的の家に着いてしまった。

「それじゃあ、行こうか」

リナはそう言ったが、体が言う事を聞かなかった。

そして、自然と諦めが心の中に生まれようとしていた。

「僕が1人で行くよ」

「え!？」

浩之の言葉にリナは考えを中断させた。

「大丈夫なの？」

「お姉ちゃんに教えてもらった通りにする」

浩之の真っ直ぐな目を見て、リナは笑う。

「浩之君、すごいね」

浩之が全く諦めようとしていない事を知り、リナは自分が情けなくなってしまうた。

「ごめんね。私、足引っ張ってばかりだね」

それでも、リナはどちらかといえば、悲しいというより嬉しかった。今まで気付かなかった事に浩之のおかげで気付いたからだ。

「私、何1人で背負いこんでたんだろうね……」

「お姉ちゃん？」

「プレゼントを配るの、今日が初めての浩之君が頑張ってるんだから、私も頑張らないとね」

リナは優等生と呼ばれていた事などをプレッシャーに思ってしまった。いた。

そして、まだ経験もほとんどない中、目標を高く持ってしまった。いた。

全てにおいて完璧に行おうと考えてしまっていたのだ。

「完璧にしようなんて考えるからダメなんだよね」

その時、リナは何とか右腕と右足が動かせる事に気付いた。

「私も一緒に行くよ」

リナは痛みを堪えて、浩之と一緒に部屋に入る。

浩之はそんなリナを支えた。

そして、無事にプレゼントを置いてソリに戻ってくる事が出来た。

「ありがとう」

リナは浩之にお礼を言った。

「それじゃあ、次の目的地に行こうか」

そう言うと、リナは次の目的地を目指して、また移動を開始した。

「私が浩之君を連れてきた理由……」

リナは笑顔で話を始める。

「浩之君が私に似ていたからなの」

「え？」

「私もやる前から無理だっけって決め付けて、色んな事から逃げているの」

浩之は真剣にリナの話の話を聞いている。

「願い事だって、絶対叶わないなんて決め付けちゃダメだよ」

リナは浩之にその事を伝えたかった。

「でも……」

「今はプレゼントを配る事に集中しようか。この話はまた後でしよう」
リナの提案に浩之はうなずいた。

「これで終わり！」

最後のプレゼントを配り、カイトは少しだけ一息ついた。しかし、すぐにまた移動を再開する。

「リナはどこだろ？」

カイトは必死にリナを捜し始めた。

「え？」

その時、カイトはリナがどこにいるのか何となくわかった。

それは、勘のようなもので信憑性はほとんどないものだったが、カイトは信じる事にした。

「あと、どれぐらいだろ？」

カイトは時計に目をやる。

残り時間は約1時間程度だ。

「あ、いた！」

カイトはリナと浩之を見つけた。

「何やってんだよ？」

遠くから様子を見たところで、プレゼントがまだたくさん残ったまま、とても間に合いそうにはない事に気づき、カイトは呆れてしまった。

その時、目的の家に着き、リナと浩之が家に入っていた。

その様子を見て、カイトはリナがケガをしている事に気付いた。

「ホント、しょうがないな……」

カイトはリナのソリに急接近すると、プレゼントをほとんど自分のソリに移す。

そして、すぐにその場を後にしようとした。

「あ、盗まれたって勘違いするかな……」

そんな心配があり、カイトはバツジの力で出した手紙を残して、すぐに離れていった。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

「大丈夫よ。急がないと間に合わないもんね」

リナはそう言いながらも、このままでは間に合わないと感じている。それでも、出来る限りはやろうと思った。

「あれ？」

その時、浩之が1枚の手紙を拾った。

「何それ？」

リナは浩之から手紙を受け取ると、笑い出した。

そこには、『私が手伝おう！ by・エリートサンタクロース』と書かれていた。

「プレゼントが3つしかないよ！」

「カイトが手伝ってくれるみたいよ」

リナはカイトがやったとすぐに気付いた。

「よし、残り3つだから頑張ろうか」

リナはそう言うと、またソリを移動させた。

「俺が間に合わなかったら、格好悪いな」

残り時間を考えれば、カイトでもプレゼントを配り終えるのは無理な気がしていた。

「ま、なるようになるか」

しかし、カイトはあまり深く考えていなかった。

それは、カイトがそういう性格だからでもある。

「何言ってるの？ 間に合わなかったら大変だよ」

「まあ、そうだけど……」

思わず返事をしてしまった後、カイトは慌てて振り返った。

「先輩！？」

「私も手伝うよ」

「でも……」

「カイトのためでもリナのためでもなく、子供達のためだからね」

レイアの言葉に、カイトは断る理由が見つからなかった。

「それじゃあ、お願いします」

「何とか配り終えるんだよ」

「はい、わかりました」

レイアのソリにいくつかプレゼントを移すと、2人は大急ぎでその場を後にした。

リナと浩之は2つのプレゼントを配り終えた。

そして、残るプレゼントはあと1つだけだった。

既に朝を間近に控え、いつ子供が起きてもおかしくない時間を迎えている。

しかし、リナに焦りはなかった。

「もしかしたら起きちゃうかもしれないけど、最後のプレゼントを渡そうか」

リナがそう言ったが、浩之は動こうとしない。

「浩之君？」

「1人で行かせてくれないかな？」

浩之の言葉にリナは驚いてしまった。

「大丈夫なの？」

「お姉ちゃんに教わった通りにするから」

浩之の真っ直ぐな目を見て、リナは笑顔を見せる。

「わかった。お願いね」

リナは最後のプレゼントを浩之に渡した。

今夜、リナと一緒にプレゼントを配って回ったが、1人でプレゼントを置きにいくとなると、浩之は緊張してしまった。

「ほら、深呼吸して。きつと大丈夫だから」

リナの言葉を聞き、浩之はそっと部屋の中に入った。

ベッドまでの距離は何歩か歩けば着く程度の距離だが、浩之は長く感じた。

一歩一歩、慎重に足を進め、浩之は枕元に近づく。そして、浩之は枕元にそっとプレゼントを置いた。

その時、浩之は眠っている少年の寝顔を少しだけ見た。

それから浩之はまたゆっくりとその場を離れ、リナが待つソリに戻った。

「浩之君、すごいよ！」

「お姉ちゃんが教えてくれたからだよ」

その時、中で寝ていた少年が動いたため、リナが少しだけ距離を開けた。

「丁度良かったね。これが、私がサンタクロースとしてプレゼントを配ってる理由だよ」

リナはそう言って、さっきの少年を指差した。

浩之はリナが指差す方へ目をやった。

少年は目を覚ますと、枕元に置いてあるプレゼントに気付いた。

「あ、サンタさん来てくれたんだ！」

少年は嬉しそうに声をあげ、すぐにプレゼントを開ける。

プレゼントの中身は、その少年が前から欲しがっていたラジコンカーだ。

それを確認し、少年はさらに嬉しそうに笑った。

「浩之君がプレゼントを配ったから、あの笑顔になったんだよ」

リナはゆっくりと言った。

「サンタクロースとして、プレゼントを配る理由は、あの笑顔を見たいからなんだ」

浩之も少年の嬉しそうな顔をじっと見た。

「あの笑顔は、一人で頑張った浩之君にも向けられてるんだよ。わかる？」

「うん、わかる……」

浩之は小さな声でつぶやいた。

「私は、この笑顔がサンタクロースへのクリスマスプレゼントだと思ってるよ」

リナは笑顔で言った。

「どう、このクリスマスプレゼントは？ 気に入ってくれた？」
リナから質問を受け、浩之は笑った。

今まで経験した事のない、初めての事ばかりで、なかなか上手くいかない事もあった。

それでも、少年の笑顔を見て、浩之は達成感のようなものを覚えていた。

「お姉ちゃん、プレゼントありがとう」

浩之の言葉にリナは笑顔を見せる。

「それと、もうやる前から出来ないなんて言わない事」

リナは真剣な顔で言った。

「浩之君はサンタクロスとして、プレゼントを配って、あの子を幸せにした。そんなすごい事が出来るんだから、これからはすぐに出来ないなんて言わない事」

「うん、わかった」

浩之は元気な返事をした。

そして、2人はまた少年の家に目をやった。

その時、騒いでいる少年に気付き、母親が少年の部屋にやってきた。

「どうしたの？」

「ママ、サンタさんが来てくれたよ！」

「ホント？ 良かったわね」

その様子を浩之は複雑な気持ちで見ている。

「まだ、最後のプレゼントが残ってたね」

「え？」

「今、浩之君の欲しいものが何なのか、わかったよ」

リナは浩之の額に手を当てる。

「今夜は色々お手伝ってくれたから、とっても素敵なプレゼントをあげるよ」

リナの言葉を聞きながら、浩之は急に眠くなり、寝てしまった。

「ママ、どこかに行っちゃうの？」

「浩之、必ず迎えに来るから、待ってて」

「うん、わかった」

浩之は養護施設でいつものように目を覚ました。

「……夢？」

いつもと変わらない景色を見て、浩之は溜め息を吐く。

「あ、プレゼントだ！」

その時、そんな声が聞こえ、浩之は辺りを見回す。

そして、みんなの枕元にプレゼントが置かれている事に気付いた。

しかし、浩之の枕元には何も無い。

「浩之君、プレゼントもらえなかったの？」

近くにいた少年にそう聞かれたが、浩之は笑顔を見せる。

「僕はもつとすごいプレゼントもらったから良いんだ！」

「え、何？」

「教えない。秘密だよ」

サンタクロースとしてプレゼントを配る事が出来た事。

その事自体が、浩之にとっては十分すぎるほど素敵なプレゼントだった。

夢だったかもしれないという気持ちもあったが、その思いに変わりはなかった。

「みんな、起きたんだね。おはよう」

朝から手伝いに来ていた由梨と浩之は真っ先に目が合った。

「浩之君、ちょっと来て」

「え？」

「良いから、来て」

由梨にそう言われ、浩之は由梨についていく。

由梨は真っ直ぐ出口を目指していた。

「何かあるの？」

「サンタさんからクリスマスプレゼントよ」

その時、浩之は出口に誰かがいる事に気付いた。

「浩之！」

その声を聞き、浩之は驚いてしまった。

「ママ!？」

「浩之、ごめんね。なかなか迎えに来れなくて」

母親は浩之を抱きしめる。

浩之が1番欲しかったもの。

それは母親との生活だった。

父親が亡くなり、浩之は母親と2人で暮らしていた。

しかし、母親の仕事も上手くいかず、浩之は結局、母親とも離れ離れで暮らす事になってしまっていた。

母親は浩之と一緒にいたいと思っていたが、浩之の事を思い、一緒に暮らせないと考えていたのだ。

しかし、昨夜、浩之と一緒に暮らしていた時の夢を見て、それが間違いだという事に気付いた。

そして、夜が明けると、こうしてすぐに浩之の迎えにやってきたのだ。

「浩之、今日からまたママと一緒に暮らしましょう」

「うん！」

浩之は嬉しそうに返事をした。

「良い笑顔だね」

「うん、そうだね」

その様子を、リナとカイトはそつと見守っていた。

「でも、あんな事して、問題になるよ」

リナはバツジの力を使い、浩之の母親に夢を見せたのだ。

それは、サンタクロースがするべき事ではない。

「帰ったら、反省文書かないといけないんだよね」

「俺が書き方教えてやるよ」

「良いよ。自分で考えるから」

リナはそう言いながら、浩之の顔をもう1度見た。

「サンタクロースになって良かった」

「……何で？」

カイトはその答えを知っている様子だったが、リナは答える事にした。

「あの笑顔が見れるから。それにみんなが幸せになれば、私も幸せだから」

リナの言葉にカイトは笑った。

「それじゃあ、そろそろ戻らないとね」

「反省文、書くの嫌だなー。右腕動かないし」

「ソリから落ちるなんてバカだなー」

「カイトに言われたくない！」

リナとカイトはそんな事を言いながら、帰る事にした。

「サンタのお姉ちゃん、ありがとう！」

その時、浩之の大きな声が聞こえ、リナは振り返る。

「浩之君、リナからのプレゼントだって気付いたんだよ」

「そうだね」

リナは嬉しそうに笑った。

この日、空からは静かに雪が降っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6564p/>

クリスマスプレゼント

2011年12月25日23時50分発行